

プラテュス πλατύς

No.
35

巻頭言

「北大交流デー」を通じて、中国の大学との国際交流

01

病態解析学分野 教授 惠 淑萍

新任教員紹介

創成看護学分野 助教 日野 真莉絵 / 医用生体理工学分野 准教授 我妻 慧 / 病態解析学分野 特任助教 堀 生実

健康科学分野 特任助教 趙 捷宇 / 地域共生モデル創発分野 特任助教 片岡 義明

02

協定締結・海外だより・国際交流

04

台北医学大学および国立台湾大学からの来学者報告
病態解析学分野 助教 村山 迪史 / 病態解析学分野 講師 大久保 真彦

Health Science Exchange Program 2025
in Shiraoi Town

リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈

International Conference of Allied Health
Sciences 2025 (Bangkok, Thailand) 参加報告
健康科学分野 講師 吉村 高明 / 医用生体理工学分野 助教 仲本 宗泰

タイ・ワライラック大学来訪
健康科学分野 教授 池田 敦子

さくらサイエンスプログラム「グローバルウェルビー
イングのための食と健康科学研究におけるデジタル
技術の進歩に関する研修」開催報告
健康科学分野 准教授 ボメゴウダ シッダバサーブゴウダ

特集

12

- ① ホームカミングデー報告
公開講座委員会 委員長 山内 太郎
- ② 第3回チャリティ講演会報告
医用生体理工学分野 教授 神島 保
- ③ 伊達広行基金により整備された歩道（通称・
伊達ロード）の開通に寄せて
保健科学研究所長 石津 明洋
- ④ Hokkaido Summer Institute 報告 <1>
リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈
Hokkaido Summer Institute 報告 <2>
健康科学分野 教授 池田 敦子
Hokkaido Summer Institute 報告 <3>
リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈
Hokkaido Summer Institute 報告 <4>
創成看護学分野 助教 コリー 紀代
Hokkaido Summer Institute 報告 <5>
リハビリテーション科学分野 教授 澤村 大輔

同窓会だより⑥

今年の総会振り返り 北大保健同窓会 会長 岡田 一範

18

研究発表

ミトコンドリアゲノムに対する放射線の遺伝
性影響を発見～放射線健康リスク推定の高精
度化と放射線防護体系の堅牢化に期待～
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典

19

腎疾患における好中球の関与～好中球細胞外トラップ
を中心に～
病態解析学分野 教授 石津明洋

統合失調症者のリアルな運転行動を世界で初めて捉
える試み～安全運転への新たな視点～
リハビリテーション科学分野 助教 岡田 宏基

皮膚エリテマトーデスの病態に『細胞老化』が関与
リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子

ジャンプ着地におけるアキレス腱負荷を効果的に減
らす指導法を発見 - 股関節屈曲がカギ～アキレス腱
障害の予防やリハビリテーションへの応用に期待～
リハビリテーション科学分野 助教 越野 裕太

TOPICS

地域とつながる新しい北大のかたち：
中庭プロジェクト
地域共生モデル創発分野責任者 矢野 理香

26

報告事項

27

platys

「北大交流デー」を通じて、 中国の大学との国際交流

病態解析学分野 教授 惠 淑萍

/ Shu-Ping Hui



北海道大学では、2007年度から2021年度にかけて、「北海道大学交流デー」（以下「北大交流デー」）として、海外オフィスを設置する国や地域の協定校等と共同で、研究交流の促進や本学の広報活動を実施した。

私は2013年3月、保健科学研究院の教員として初めて「北大交流デー」に参加した。これを契機として、本学の学部生・大学院生等31名を引率し中国を訪問した。これまでに交流を行った中国の大学及び病院は16施設にのぼり、その内訳は、廈門大学、大連理工大学、蘭州大学、西安交通大学、西安交通大学第一附属医院、华中科技大学、湖南大学、南京大学、東南大学、復旦大学、南開大学、吉林大学、東北師範大学、浙江大学、中国科学院大学、東北大学である。

保健科学研究院の交流先（研究室・研究所・学部）の選定は、申請者がインターネットや電話により調査して決定したが、常に北大側を上回る数の教員・学生が中国側から参加し、互いの研究紹介、学生発表、研究室見学などの実質的な交流を行うことができた。この交流は、中国側大学ホームページによって報道され、本研究院の中国における知名度向上につながった。また、「北大交流デー」は日本人の参加学生の勉学意欲を高め、参加した学部学生の大半が大学院へ進学した。

1. 北大 保健科学研究院高度脂質分析ラボ（惠 淑萍教授）が中国 清華大学（張 新栄教授）と数年にわたり、脂質に関する共同研究を行ってきた。

張 新栄教授との共同研究成果として、分析化学の世界トップジャーナル（Analytical Chemistry）に以下の論文（①、②）を掲載することが実現できた。なお、下記2番目の論文は、生きた細胞において、1個の脂肪滴の脂質組成を分子レベルで分析する画期的方法に関する報告である。これまで分子情報が乏しかった脂肪滴研究を飛躍的に高める可能性があ

る点を高く評価され、本論文はAnal Chem誌（IF: 6.042, Category Ranking 4.9% in Chemistry, Analytical; JCR 2019）の表紙を飾った（右図）。

①Zhao Y, Hui SP, et. al. Anal Chem. 89: 10270-10278, 2017

②Zhao Y, Hui SP, et. al. Anal Chem. 91:4466-4471, 2019



なお、齋藤 健保健科学研究院長（当時）は清華大学との北大交流デーにご参加され、保健科学研究院を紹介していただいた。

2. 中国科学院大学との交流

①北大交流デーを通じて中国科学院大学生命科学院執行院長および学生との交流



2019年3月21日中国科学院大学にて
前列左から3番：丁文軍執行院長

②北大と中国科学大学の教員と学生の学術交流



2019年3月21日中国科学院大学にて

③丁文軍院長を招いて北大保健科学研究院にて学術交流を行った。



丁文軍院長講演中（2019年7月5日
北大保健科学研究院にて）

3. 北大保健科学研究院が中国浙江大学との交流

劉偉教授の研究室との学術交流



2018年3月27日
中国浙江大学にて

大学間の学術的国際交流は、日本の大学の国際競争力を高め、グローバル社会で活躍できる人材を育成するために不可欠であり、今後も継続していきたい。

新任教員紹介—就任のご挨拶—



令和7年4月1日付で創成看護学分野に助教として着任いたしました。私は本学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、助産師として総合病院の産婦人科病棟に勤務していました。臨床では、日々沢山の妊産褥婦様に出会い、皆様との関りを通して助産・看護実践にまつわる様々な経験、学びを得ることができました。同時に、多くのご出産に携わる度に、女性が健康な妊娠期を過ごし、安全な出産を迎えることが如何に奇跡的なことであるかを痛感してきました。妊娠期の健康は、妊婦と生まれてくる子の生涯

創成看護学分野 助教 **日野 真莉絵** / Marie HINO

の健康に影響を及ぼします。少子高齢化が進み、多様化する現代社会において、周産期にある女性へのケア需要は益々高まっていくことが予測されます。

私は、妊娠期にある女性とその家族の健康を守るために“助産師にできることはなにか”を深く考えるようになりました。そして、本学保健科学研究院の修士課程、博士後期課程に進学しました。進学後は妊娠期の健康を守るための研究を行い、博士号を取得しました。

今後はこれまでの経験を活かし、保健科学研究院の一員として微力ながら教育・研究に尽力したいと考えております。何卒ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



令和7年4月1日付で、北海道大学大学院保健科学研究院 医用生理工学分野の准教授として着任いたしました。私は駒澤大学を卒業後、がん研究会有明病院の核医学チームにて診療放射線技師として勤務を始め、在職中に横浜市立大学大学院にて修士課程を修了しました。その後、東京都健康長寿医療センター研究所 神経画像研究チームにて技術員・研究員として脳神経 PET (positron emission tomography) の撮像および研究に従事しながら、九州大学大学院にて博士号を取得しました。病院に在職中の頃から、将来は大学で研究・教育に従事することを目標としておりましたので、2021年からは北里大学医療衛生学部にて、診療放射線技師の教育に携わってまいりました。専門は放射性医薬品を用いた核医学検査であり、近年はアルツハイマー病の診断に関するアミロイド PET やタウ PET の実用化、ならびに半導体核医学装置の臨床応用に関する研究に取り組んでいます。教育・研究を通して皆様と交流できることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

医用生理工学分野 准教授 **我妻 慧** / Kei WAGATSUMA

ら、九州大学大学院にて博士号を取得しました。病院に在職中の頃から、将来は大学で研究・教育に従事することを目標としておりましたので、2021年からは北里大学医療衛生学部にて、診療放射線技師の教育に携わってまいりました。専門は放射性医薬品を用いた核医学検査であり、近年はアルツハイマー病の診断に関するアミロイド PET やタウ PET の実用化、ならびに半導体核医学装置の臨床応用に関する研究に取り組んでいます。教育・研究を通して皆様と交流できることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。



令和7年4月1日付で北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野にアンビシャス特別助教として着任いたしました。私は、同大学生命科学院において薬科学の博士号を取得いたしました。その後、博士研究員を経て現職に至ります。

主な研究テーマは、ミトコンドリアを介して神経細胞の発達や損傷を理解することです。これまで神経回路形成におけるミトコンドリアの役割や局所的な薬物送達によりミトコンドリア機能を向上させる技術に関する研究を行ってきました。現在は薬以外の

病態解析学分野 特任助教 **堀 生実** / Ikuma HORI

介入を用いたミトコンドリア機能制御技術の探索やミトコンドリア移植療法に関する研究に取り組んでいます。

これまでの研究経験を活かしつつ、本学での教育・研究に貢献できるよう尽力します。保健科学研究院の一員として、神経変性疾患の新規治療技術を創出することで人々の生活の質の向上に貢献できるよう努めて参ります。まだまだ至らない点も多くございますが、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。



医療ビッグデータを用いて現代医療の実態を多角的に分析し、これまで見落とされがちだった重要な課題を明らかにすることを目的としています。主に、公開統計データや診療報酬明細書（レセプト）などの既存データを活用し、地域医療の公平性や医療政策への示唆を得る研究を行っています。

これまでに取り組んだ研究テーマには、COVID-19が北海道における死亡率へ与えた影響の評価や、地域別の医療資源分布が死亡率に与える影響の分析などがあります。また、高齢者を対象とした睡眠薬使用の傾向や、

健康科学分野 特任助教 **趙捷宇** / Jieyu ZHAO

ポリファーマシー（多剤併用）の現状をレセプトデータから明らかにし、年齢や共病、医療機関の種類など多様な要因との関連性を検討しています。

加えて、医療経済学的視点からの研究も行っており、新たな薬剤の費用対効果を評価しています。新規治療薬の導入が医療現場の業務負担やコストに与える影響を定量的に示すことを目指しています。

これらの研究には、公衆衛生学、薬学、統計学、医療経済学の知識を横断的に活用しており、実証的かつ実践的なアプローチを重視しています。今後も、地域や患者にとってより持続可能で公平な医療体制の構築に貢献することを旨とし、研究を進めてまいります。

地域共生モデル創発分野 特任助教 **片岡義明** / Yoshiaki KATAOKA



令和7年4月1日付で、北海道大学大学院保健科学研究院地域共生モデル創発分野の特任助教として着任いたしました。私は、本学理学療法専攻の3期生として卒業後、理学療法士として臨床に従事してまいりました。その後、整形外科を中心とした病院に勤務を続けながら、本学大

学院の修士課程と博士後期課程を修了いたしました。この度、長くお世話になった母校で教育・研究・地域貢献に携わる機会をいただき、大変嬉しく、光栄に感じております。

着任後は、「中庭プロジェクト」の推進に取り組んでおります。本プロジェクトはキャンパス内で地域住民と教職員・学生がつながり、協働することで、地域住民の

社会参加の場を創出すると同時に、研究や教育面での効果も期待される取り組みです。具体的には、地域の方々が気軽に立ち寄れる場を整備し、学生や教職員との交流を通じて健康づくりや学びの機会を提供することを目指しています。また、こうした活動を通じて、地域課題の解決や新しい研究テーマの創出にもつなげていきたいと考えております。

今後は、自らも日々成長しながら、皆様と協働し、本プロジェクトをさらに発展させていきたいと考えております。「地域とつながる新しい北大のかたち」を体現できるよう、教育・研究・地域連携の三本柱を意識し、幅広い視点で取り組んでまいります。引き続きご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



台北医学大学および国立台湾大学からの来学者報告

病態解析学分野 助教 村山 迪史 / Michito MURAYAMA・病態解析学分野 講師 大久保 寅彦 / Torahiko OKUBO

検査専攻では、2012年に北大医学部保健学科と部局間協定を締結した台北医学大学（Taipei Medical Univ.、以下 TMU）と継続的に国際交流を実施しており、コロナ禍の2019年から2023年を除き、TMUの医療技術学部（College of Medical Science and Technology）の学生を受け入れてきました。本年はそれに加え、北大と大学間交流協定を締結している国立台湾大学（National Taiwan Univ.、以下 NTU）からの打診を受け、NTUの臨床検査学科（Department of Clinical Laboratory Sciences and Medical Biotechnology）の学生の来学も受け入れ、令和7年7月14日（月）から18日（金）までの間、両大学から合わせて学生12名と引率教員3名が来学されました。

来学期間中には、検査専攻の各研究室の見学および所属学生との交流、検査専攻で実施されている実習の見学、北大病院の検査・輸血部および超音波センターの見学等を実施しました。また、本年度は、同時期に開催された当研究院の親睦会「夏の会」にご招待し、本学教員との交流を行いました。両大学の引率教員からは、「学生たちの良い刺激となる充実した来学であり、今後も継続して来学させたい」とのコメントをいただいております。特にNTUの新規来学をきっかけとして、現在、部局間協定の締結についても検討を開始しております。

今回の来学受け入れは、石津研究院長をはじめ検査専攻教員の皆様、親睦会幹事の先生方をはじめとする当研究院の教職員の皆様、大学院生・学部生、ならびに北大病

院検査・輸血部および超音波センターのご協力のもとに実現いたしました。この場を借りて、皆様に深く感謝を申し上げます。



●来学期間：令和7年7月14日（月）午前～令和7年7月18日（金）午後

●来学者

TMU：学部学生5名、修士課程学生1名、引率教員1名（Dr. Pan Wen-Yu） 合計7名

NTU：学部学生4名、修士課程学生2名、引率教員2名（Dr. Lin Jing-Yi、Dr. Wu Jui-Ching） 合計8名

●来学中の主な活動（箇条書き）

- ・石津研究院長への表敬訪問
- ・親睦会「夏の会」への招待
- ・北大キャンパスツアー
- ・検査専攻における各研究室の見学および研究室体験（半日）
- ・北大病院の見学（検査・輸血部および超音波センター；技師長および専攻教員が同行して説明）
- ・北大病院の心エコー室における心エコー検査見学（患者からの同意を取得して、専攻教員が実施）





Health Science Exchange Program 2025 in Shiraoi Town

リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈 / Mina SAMUKAWA

2025年7月14日～18日、北海道大学大学院保健科学研究所とメルボルン大学大学院保健科学領域の大学院生・教職員による国際・地域交流プログラムが白老町にて実施されました。本プログラムは、「国際・地域交流を通じて保健科学に関する知識・文化・視点を学ぶ」ことを目的に、各部局の強み・特色に対する評価事業「ヘルスサイエンスを担う未来世代の人材育成を目指す健康エクステンションプロジェクト」の一環として企画・開催されたものとなります。本学からは大学院生8名と教職員5名（寒川美奈教授、池田敦子教授、石田知也講師、越野裕太助教、小松崎美帆博士研究員）、メルボルン大学からは大学院生12名と教員2名（Tandy Hastings-Ison講師、Kelley Graydon准教授）が参加し、白老町の職員や地域住民の皆さま、総合型地域スポーツクラブSafilvaのご協力のもと、国際的かつ地域に根ざした教育と交流の機会が提供されました。

プログラム初日には、白老町教育委員会の長尾様より町の特色や健康課題、健康づくりの取り組みについて紹介を受けた後、両大学の学生と教職員の交流活動を行いました。地域の背景を知ることで、翌日からの活動への理解と期待が一層深まりました。

2日目には、白老町高齢者大学の学生約80名を対象に健康測定会を実施しました。視覚・聴覚・理学療法3領域の学生たちが協力しながら町民の方々とのコミュニケーションを楽しみ、世代や文化、言葉の壁を超えた新たな交流が生まれ、学びと発見の多い一日となりました。

3日目は、白老町の認定こども園緑丘保育園を訪問し、園児との交流プログラム「Teddy Bear Hospital」を実施しました。ぬいぐるみを用いて、子どもたちに医療の体

験や健康の大切さを楽しく伝えると共に、学生も子どもたちと関わるスキルを学ぶ機会を提供しました。

4日目には地域住民へインタビューを行い、生活や健康意識、地域課題に関する多様な視点を収集しました。学生たちは地域保健や健康支援活動の実際を学び、文化的背景や居住地域の違いが健康への影響を学びました。

最終日の成果報告会では、白老町の副町長、教育委員会教育長、町職員・地域住民の皆さまにも参加いただき、健康測定会の報告と、視覚・聴覚・理学療法など多角的な視点から健康づくりのヒントを発表し、地域に根ざすヘルスサイエンスの実践を発表する大変貴重な機会となりました。



本プログラムを通じて、参加者は両国の文化や医療制度の違いを学び合うとともに、地域社会と連携した保健科学に対する実践的理解を深めることができました。国や世代を超えた交流を通じて、次世代の保健科学を担う学生たちにとって貴重な学びの機会となり、今後の国際的な研究・教育交流の発展につながることを期待されます。

ご協力いただきました白老町の皆さまに、心より感謝申し上げます。





International Conference of Allied Health Sciences 2025 (Bangkok, Thailand)参加報告

健康科学分野 講師 吉村 高明 / Takaaki YOSHIMURA ・ 医用生体理工学分野 助教 仲本 宗泰 / Takahiro NAKAMOTO

2025/8/29-30にかけて、Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand)にて開催されたInternational Conference of Allied Health Sciences 2025 (ICAHS2025)にてInvited Speakerとして吉村と仲本が講演を行いました。ICAHS2025はFHS International Conferenceと同様にChulalongkorn University (Faculty of Allied Health Sciences)が主催する国際シンポジウムです。今回、ICAHS2025への渡航に合わせてChulalongkorn University Hospitalとの国際共同研究に関する打ち合わせ(2025/8/28)も実施してきましたので合わせて報告いたします。

Chulalongkorn University (Faculty of Allied Health Sciences)と北海道大学(大学院保健科学研究所)は2018年より部局間MOUを締結しております。今回の交流はこれまでの両大学の関係をさらに深化させるものと期待いたします。

<スケジュール及び講演内容>

2025/8/28

Division of Radiation Oncology, Department of Radiology, Faculty of Medicine, Chulalongkorn University and Her Royal Highness Princess Maha Chakri Sirindhorn Proton Center, King Chulalongkorn Memorial Hospitalを訪問し、Anussara Prayongratの案内のもと、放射線治療室を



Her Royal Highness Princess Maha Chakri Sirindhorn Proton Center, King Chulalongkorn Memorial Hospitalの陽子線治療室にて (写真左から仲本、吉村、Anussara Prayongrat氏)

見学しました。現時点で陽子線治療ができるタイ唯一の施設であり、治療室のスケジュールの都合で陽子線治療の適応があっても利用できないケースもあるとのことでした。治療室見学後、Kanokporn ThonglertとYothin Rakvongthaiも参加して、放射線治療分野におけるAIの活用やRadiomicsを用いたアウトカム予測に関するResearch Discussionを実施した。今後、これらの研究領域において、国際共同研究を推進してまいります。



研究ミーティング後の集合写真 (写真左: Yothin Rakvongthai氏、右: Kanokporn Thonglert氏)

ICAHS2025の開催に先立ち、タイ料理レストランにてWelcome Dinnerが催されました。ICAHS2025のRadiological Technology SessionのInvited SpeakerやChulalongkorn UniversityのFaculty Member (Lukkana Apipunyasopn, Pawanrat Chalorak, Saras Khongwirotphan, Thititip Tippayamontri, and Kitiwat Khamwan)とリラックスした雰囲気の中で会食し、有意義な時間を過ごすことができました。

2025/8/29

ICAHS2025の会場は、Faculty of Allied health Sciences, Chulalongkorn Universityと隣接するChaloem Rajakumari 60 Buiding (Chamchuri 10)にて開催されました。発表者は主に Faculty of Allied health Sciences, Chulalongkorn UniversityとMOUを既に締結している施設または締結予定の施設からの参加者 (Taiwan, Malaysia, United Kingdom, Australia, United States of America, China, Singapore, and Japan) でした。

Professor Wilert Puriwat (President, Chulalongkorn University) による Opening Remark の後、Yongyuth Mayalarp (President, Thai Lifestyle Medicine and Wellbeing Association) による Lifestyle Medicine をテーマとした Plenary lecture が行われました。Coffee break を挟み Medical Technology, Physical Therapy, Nutrition and Dietetics, 及び Radiological Technology に分かれて進行していきました。我々は Radiological Technology のセッションに参加していたため、他セッションの様子を報告できないことが残念でなりません。教員以外には、多くの大学院生が参加していました。以下、Radiological Technology のセッションにおける7名の講演の概要を報告いたします。



1. Takahiro Nakamoto (Hokkaido University, Japan)
“Dosiomics: Emerging novel dosimetric analysis for evaluating radiotherapy outcomes” と題した講演で、Radiomics の基本から Dosiomics に関する研究成果の一部を報告した。
2. Jeng-Yuan Chiou (Professor, Chung Shan Medical University, Taiwan)
“Real-world Assessment of Reinfection with SARS-CoV-2: Implications for Vaccines” と題した講演で、Covid-19 に関して Chemotherapy と Radiological Treatment を含む Real-wold Dataset (TriNetX) を使ったコホート研究について紹介された。このデータセットには医用画像は含まれていないが、匿名化処理がされた膨大なアウトカムデータが含まれており、AI 研究におけるモデル構築等への活用に注目されており、近年 TriNetX を使った論文が多数公開されている。

3. Vincent W.S. Leung (The Hong Kong Polytechnic University, China)
“AI in Radiotherapy” と題した講演で、Virtual Contrast-Enhanced MRI などを使った放射線治療における AI の活用例や香港理工大学が開発した肺がん放射線治療支援ソフト (LungRT Pro) における肺の換気・灌流マップを可視化して、肺の機能温存を目指した研究を紹介された。さらに、個別化医療を目指した Radiomics の活用例を紹介された。最後に、前立腺癌に対する研究計画について紹介された。
4. Shuichi Shiratori (Siriraj Hospital, Thailand)
“Cutting-Edge Advancement and Emerging Trends in Theranostics for Personalized Medicine” と題した講演で、DOTATATE や PSMA などタイにおける核医学治療に関するこれまでの経験を紹介された。Lutetium-177, Terbium-161, Actinium-225 などによる最新の核医学治療について紹介された。
5. Naoki Hayashi (Professor, Fujita Health University, Japan)
“Recent advances and clinical implementation of surface guided radiation therapy” と題した講演で、SGRT ガイドライン (AAPM-TG147, 302) を交え、体表ガイド放射線治療に関する最近の潮流について紹介された。商用利用されている体表ガイドシステムの紹介と乳癌や頭頸部癌に対する体表ガイド放射線治療について紹介された。
6. Takaaki Yoshimura (Hokkaido University, Japan)
“Artificial Intelligence for MR-guided radiation therapy” と題した講演で、MR 画像誘導放射線治療における AI の活用例として、Segmentation や CT Generation に関する研究紹介を行った。また、MR 画像誘導陽子線治療の実現に向けた取り組みについて紹介した。
7. Ping-Huei Tsai (Chung Shan Medical University, Taiwan)
“Radial T2* Mapping for Eary Detection of Meniscal Degeneration in Knee Osteoarthritis” と題した講演で、膝の MRI 撮像に関する研究成果を紹介された。Conventional T2* mapping よりも Radial T2* mapping が良好な画質が得られることを紹介された。



ICAHS2025の初日の最後は同会場の20階にて Collaboration meeting と Welcome dinner が開催されました。現在行われている研究者間の交流として Chulalongkorn University の研究戦略 (International Symposiums, Exchange Faculty Travel Grant, Adjunct Professor, and Invited Researcher) が紹介され、Student Exchange Scholarships を含めた学生交流についても報告されました。タイの伝統的な音楽と民族舞踊が披露されるなか、タイ料理と共に参加者間の交流が行われました。



発表後のセレモニー(1) Kitiwat Khamwansi氏



発表後のセレモニー(2) Lukkana Apipunyasopn氏

2025/8/30

前日に引き続き、3名の演者による講演が行われました。



8. Kitiwat Khamwan (Chulalongkorn University, Thailand)

“Dosimetry for 177-Lu Personalized Molecular Radiotherapy: Optional or Essential?” と題した講演で、“Theranostics” (Therapy+Diagnostics) という核医学治療において注目されているトピックスについて紹介され、King Chulalongkorn Memorial Hospital における Lu-177-DOTATATE と Lu-177-PSMA を用いた核医学治療に関する経験や線量評価に関する研究成果について紹介された。

9. Gina Bouchard (University of Colorado Anschutz Medical Campus, USA)

“Spatiometabolic mapping of cytoarchitectural changes in lung adenocarcinoma following radiotherapy” と題したオンライン講演で、放射線治療後の肺癌において、腫瘍の微小環境の細胞配置と代謝の変化に関する研究成果について紹介された。

10. Sararas Khongwirothphan (Chulalongkorn University, Thailand)

“Unlocking Hidden Patterns: How Radiomics Advances Precision Health in Cancer Care and Beyond” と題した講演で、個別化医療に向けた CT/MRI based Radiomics を用いた研究成果について紹介された。演者は FHS2025 にて来札予定であり、同様の内容を発表される予定である。



最後に Award Announcement & Closing Ceremony が開催されました。

<Home Page Link>

International Conference of Allied Health Sciences 2025: <https://www.icahs2025.com/home.php>

Faculty of Health Sciences, Chulalongkorn University: <https://www.ahs.chula.ac.th/en/>



タイ・ワライラック大学来訪

健康科学分野 教授 池田 敦子 / Atsuko IKEDA

2025年9月3日に、ワライラック大学の Supabhorn Yimthiang 公衆衛生学院長ら8名の研究者および事務スタッフが保健科学研究院を訪問しました。当日は国際連携室の山内太郎室長、および池田敦教室員と長谷川直哉室員が同席し、双方の学部および大学院、研究に関して意見を交わしました。また、保健科学研究院の公式訪問に先立ち、9月2日は池田教授が率いる健康科学分野環境健康科学研究室メンバーとインフォーマルな研究交流を行いました。研究室に所属する大学院生や研究生、またワライラック大学教員が研究紹介を行い、今後の共同研究に向けた意見交換を行いました。

ワライラック大学は、創立が1992年と比較的新しい大学ではありますが、Times Higher Education ランキン

グでタイ国内第6位、特に研究の質と国際交流活動においてタイのトップ3に入る大学です。公衆衛生学院の学部教育では地域保健、環境保健、および労働安全衛生の3つの専攻を有しています。大学院は環境健康安全プログラムに加えて、英語での学位取得を可能にした国際プログラムを有し、積極的に海外連携を行っています。

保健科学研究院との連携においては、保健学科に所属する全専攻を対象とした国際保健学の講義において、タイの環境衛生課題に関する話題提供に協力をお願いしています。2025年度は11月21日に Udomratana Vattanasit 助教をゲストスピーカーに招きました。大気汚染、屋外廃棄物、気候変動という世界的な環境課題とそれらをめぐるタイの状況についての説明に加えて、特に学生とともに地域住民や学童に向けて取り組む汚染状況の測定、清掃による環境整備、教育啓発活動に力を入れていることが印象的でした。たくさんの写真を交えて紹介いただくことで、学生にとっても有意義な講義となりました。

今後も地球規模の環境課題解決に向けて、ワライラック大学との研究・教育連携を深めていくことができると考えています。



意見交換の様子



公式訪問集合写真



研究室メンバーと保健科学研究院の前で



さくらサイエンスプログラム「グローバルウェルビーイングのための食と健康科学研究におけるデジタル技術の進歩に関する研修」開催報告

健康科学分野 准教授 ポメゴウダ シッダバサーブゴウダ / Bomme Gowda SIDDABASAVE GOWDA

2025年9月22日～30日の9日間、JST さくらサイエンスプログラムの助成を受け、北海道大学とインドの4大学・1研究機関との交流プログラムを行いました。インドの大学生・院生・研究者が、北海道大学内の様々な研究室を訪問し、研究者と熱い議論を交わしました。3度目となる今回は、インド工科大学ハイデラバード校 (IITH)、ジャガドゥル・スリ・シヴァラートリーシュワラ科学技術大学 (JSSTU)、マイソール大学 (UOM)、D.Y. パティール Vidyapeeth 博士私立大学 (DPU)、中央食料技術研究所 (CFTRI) から、7名の学生と5人の教授が来日されました。

今回のプログラムの特徴は、なんとと言っても初日に国際学会に参加したことです。9月22日、GCF 2025 Sustainability in Agriculture, Food, and Health を学術交流会館で行いました。日本、インド、韓国、タイの研究機関から研究者が集まり、実に多様なジャンルの講演が行われました。産業技術総合研究所(日本)、グルナ

の親密な交流が実現されました。学会後に中央食堂で行われた懇親会では、北大で活躍するインドの先輩留学生に、日本での研究活動について積極的に質問する学生もおり、嬉しい瞬間でした。彼らにとって、将来のキャリアを考える上で非常に有意義な時間になったと思います。

本学会において、保健科学院からは、石津明洋学院長に学会の special adress を務めていただきました。また当研究室の学部生・院生も英語での口頭発表やポスター発表に挑戦し、なんと検査専攻学部4年生の重村悠人君が最優秀口頭発表賞に輝きました。こういった機会は、プログラム参加者と日本人学生との交流をぐっと促進するきっかけにもなりました。

休日をはさみ、3日目からの研究室訪問では、保健科学研究院ツアーを行いました。当研究室高度脂質分析ラボラトリーはもちろん、千見寺貴子教授、杉森博行准教授、石津明洋教授、加賀早苗准教授の研究室にもご協力いただき、医療専門職の枠を超えた多彩な分野の研究が行わ



ナクテブ大学(インド)、済州大学校(韓国)、モンクット王工科大学(タイ)の研究者が、植物の機能性物質や品質評価に関する様々な研究を発表しました。参加者は熱心に耳を傾けるだけでなく、積極的に質問する様子も見られました。また、一部の教授は口頭発表、学生はポスター発表を行い、各々が自分の成果を堂々と発表し、一対一

れている保健科学院の魅力をアピールできました。神経科学、コンピュータサイエンス、バイオテクノロジーのバックグラウンドを持った参加者もあり、強い興味を示していました。各研究室では積極的な情報交換が行われ、今後のコラボレーションが期待されます。ご協力いただきました先生方、学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

保健科学院以外では、今回新たに工学院の水再生工学研究室や環境健康科学研究教育センターを訪れることができました。参加者は、まったく異分野の研究手法に興味が続く様子でした。また、北キャンパスのニコイメーティングセンターと次世代物質生命科学研究センター、環境科学院にも訪れました。これらの場所では、最先端の技術や実験装置を実際に体験することができ、大変具体的な議論が繰り広げられていました。

休日にはレクリエーションもあり、おたる水族館や神威岬、白い恋人パーク、青少年科学館を訪れました。水族館では、初めて見る生物も多かったようで、熱心に観察する様子が見られました。科学館では、かの国民的ネコ型ロボットのプラネタリウムショーを鑑賞し、「このキャ

クター知ってる！」と皆で盛り上がりました。研究室メンバーのバックアップもあり、初めての北海道を大変満喫した様子でした。最終日には、保健科学院にて、学院長の石津明洋教授から認定証の授与があり、一人一人が9日間のプログラムを振り返る短いスピーチを行いました。今回の参加者は、北海道大学とのコラボレーションを望んでいる人が多く、様々な教授と積極的に交流している姿が印象的でした。

最後になりますが、このプログラムは、我々の研究室だけではなく、皆さんのご協力のもとに成り立っています。今回ご協力いただいた研究室の皆様、いつもご支援いただいている皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



ホームカミングデー報告

公開講座委員会 委員長 山内 太郎 / Taro TAMAUCHI

秋

の気配が深まり、キャンパスの木々も色づき始めた2025年9月27日(土)、北海道大学大学院保健科学研究院にて「ホームカミングデー2025」が開催されました。本年度は、昨年度に引き続き対面とオンラインを併用したハイブリッド形式での実施となりました。

プログラムに先立ち、午後1時から研究院敷地内にて、



お披露目となった歩道の銘板

3年前に現職のまま急逝された故・伊達広行元研究院長を偲んで新たに整備された小路(歩道)の開通式が執り行われました。式典にはご遺族も参列され、鮮やかなレンガ造りの歩道と、その中に設置された銘板がお披露目されました。教育・研究に情熱を注がれた伊達先生の想いが、この新しい道を通じて、未来を歩む学生たちへと受け継がれていくことを願ってやみません。



石津研究院長による挨拶

いただきました。

最初の講演者は、札幌放射線技師会会長であり、北海道科学大学保健医療学部診療放射線学科の学科長を務める菊池明泰氏です。「『医技短』から始まった診療放射線技師人生」と題された講演では、本研究院のルーツである医療技術短期大学部(医技短)時代のエピソードから話が始まりました。菊池氏は、半世紀近くにわたるキャリアの中で、臨床現場での実践と研究職への道のりをどのように歩んでこられたのかを、ユーモアと情熱を交えて語られました。特に、技術革新の著しい診療放射線技師という職業の「これから」についての力強いメッセー



菊池明泰氏による講演の様子

ジは、現役学生や若手研究者にとって、自身のキャリアを考える上での大きな指針となりました。

続いて、北海道大学名誉教授であり、元保健科学研究院長の小林清一氏より、「北大卒後50年を振り返って～『保健科学』の追究と実践～」と題したご講演をいただきました。



小林清一氏による講演の様子

小林先生は、北大卒業後の50年、そして70余年という人生の歩みを振り返りながら、長年取り組ん

でこられた臨床実践と重厚な研

究内容を紹介されました。また、初代保健科学研究院長として、医学部保健学科および研究院の設置前後の激動期に直面したご苦労や、その裏話も披露されました。分野の枠を超えた「保健科学」という学問領域がいかんして確立され、どのような意義を持つのかについて再認識させるお話には深い感銘を受けました。

講演会の終了後は、医学部保健学科・医療技術短期大学部同窓会の総会が行われました。そして、すべてのプログラム終了後には、交流会として、自転車置き場特設会場にて「ジンギスカンパーティー(ジンパ)」が開催されました。炭火を囲み、秋空の下でジンギスカンを味わうという北大ならではのイベントで温かい交流の輪が広がりました。

ご参加いただいた皆様、そして開催にご尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。来年もまた、お会いできることを楽しみにしております。

第3回チャリティ講演会報告

医用生理工学分野 教授 神島 保 / Tamotsu KAMISHIMA

2

025年8月21日(木)夕方に、第3回チャリティ講演会「医療現場でのshared decision making (SDM) 革命」が、北海道大学医学部学友会館フラテ フラテホールで開催されました。講師はコロンビア大学の中川俊一先生で、近著『あなたのACPはなぜうまくいかないのか?』をもとに、終末期医療における意思決定支援や「4つの質問」「3段階のプロトコル」など、臨床現場で実践できるAdvance Care Planning (ACP) 手法のご紹介とともに、一般の皆様にも、「自分らしい生き方・逝き方」を考えるきっかけとなるようなお話をしていただきました。



講演中の中川俊一先生

残暑厳しい折、講演には、北海道大学関係者44名、卒業生および一般参加者26名の計70名が参加くださいました。講演の冒頭で中川先生は、従来のACPが「延命をするかしないか」という選択肢提示に偏りがちであることを指摘され、「患者の価値や生き方を共有し、そのうえで治療方針を共に考えることが本質である」と強調されました。さらに、患者との対話を「知識共有→価値の明確化→治療方針の検討」という三段階に整理するThree-Stage Protocolの枠組みを提示され、特にStage 2である「価値の明確化」こそが最も重要であり、医師のみならず看護師・ソーシャルワーカーなど多職種が関わる意義を説かれました。

また、患者の価値を引き出すための3つの問いとして

「Tell me more (もっと教えてください)」「Why (なぜですか)」「What else (他にはありますか)」を紹介されました。これらの質問が、患者の人となりを理解し、より現実的で価値に即したゴール設定を導く鍵となることを、豊富な臨床例を交えて解説されました。

講演後には活発な質疑応答が行われました。医師とコメディカルの連携のあり方、急性期や小児領域でのACPの実践方法など、現場に即した具体的な質問が続き、参加者の関心の高さがうかがえました。中川先生は一つひとつの質問に丁寧に回答され、実践的なアドバイスや現場での工夫を共有されました。さらに、講演後のアンケート(参加者70名のうち、50名が回答)に寄せられた質問や意見にも真摯に応じられ、参加者一人ひとりの疑問や思いに誠実に向き合う姿勢が印象的でした。

アンケート回答者の約9割が「非常に役に立った」「役に立った」を選択、実践的でわかりやすい内容に高い評価が寄せられました。「ACPを前向きに捉え直せた」「Tell me whyという言葉が印象に残った」「看護師としての役割を再認識した」といった感想も多くありました。中川先生は「すべての患者が“美しい最期”を迎えられるわけではありません。重要なのは苦痛を減らし、納得のいく形で過ごせるよう支えることです」と語られ、現場の葛藤に寄り添う姿勢を示されました。

今回の講演会は、保健科学研究院企画戦略室、事務室、広報室の皆様のご協力により実現することができました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

北大保健チャリティ講演会

医療現場での shared decision making 革命
(意思決定の共有)

近年医療現場で注目されている「意思決定の共有 (Shared Decision Making)」ですが、実際の現場では「人生会議 (ACP: アドバンス・ケア・プランニング)」がうまく進まず、届かずも少なくありません。
本講演では、米国で活躍する緩和ケア専門医・中川俊一氏が、「なぜ人生会議がうまくいかないのか?」を、自身をもとに具体的に解説いたします。
中川氏は、手術手技と同様に、「コミュニケーションも「学べるスキル」であると強調し、楽観で抱く「3ステージプロトコル」に沿って、実践的な対応法をわかりやすく紹介します。患者様はもちろん、ご家族のケアを考える一般の方にも役立つ内容です。

中川 俊一 先生
コロンビア大学医学部教授
成人緩和ケア入院部門ディレクター

北大保健チャリティ講演会ポスター

伊達広行基金により整備された歩道（通称・伊達ロード） の開通に寄せて

保健科学研究院長 石津 明洋 / Akihiro ISHIZU

令

和7年9月27日澄みわたった秋晴れの午後、保健科学研究院正面玄関前駐輪場野外特設会場において北海道大学大学院保健科学研究院敷地内歩道（通称・伊達ロード）の開通式が挙行されました。この日は北海道大学ホームカミングデーで、主賓である伊達佳代子様（故伊達広行先生奥様）と摩彦様（ご長男）の他、卒業生や在校生・教職員ら約20名が集い、整備された歩道の開通に立ち合いました。

このたび整備されたのは、保健科学研究院正面玄関前駐輪場から北13条共同駐車場に抜ける通路で、ここには以前、正方形の敷石が飛び飛びに配置されていました。敷石がいつ、誰によって配置されたのか記録を見つけることができませんでしたが、神島保学院長補佐の調査によると、最初は直線的に配置されていたものが、子どもの園保育園ができたことでコースが変更されたとのこと。子どもの園保育園の開園が平成17年ですので、敷石はそれより前に配置されたことが分かりました。通勤・通学に便利な通路で、多くの学生や教職員が利用していましたが、公式のものではなく、敷石に躓いて転倒するリス

クもありました。伊達先生も良く利用されていて、書籍を脇に抱え、片手にはコーヒーをもって歩いておられた姿が印象に残っています（矢野理香副研究院長談）。この通路が、初夏には新緑に映え、秋には木々の紅葉に馴染むナチュラルな色合いのインターロッキングに生まれ変わりました。

開通式は蝦名康彦副学院長が司会を務め、研究院長挨拶の後、伊達佳代子様、研究院長、矢野副研究院長、神島学院長補佐によりテープカットが執り行われました(図1)。矢野副研究院長による閉会挨拶の後には、伊達先生奥様と摩彦様を皮切りとして、ご参加のみなさまが歩道を散策し、在りし日の伊達広行先生に想いを寄せました(図2)。

伊達広行先生は2012年4月から二期4年間、第二代研究院長を務められた後、2020年4月から再び第四代研究院長を担当されました。この二度目の時期はまさにコロナ禍に突入するタイミングで、過去に経験したことがない局面に立たされ、大変ご苦労されたことと思います。そのような中であっても、伊達先生は強いリーダーシップを発揮され、私たちを導いてくださいました。

(次ページにつづく)



図1. テープカット

(左から) 矢野副研究院長、石津研究院長、伊達佳代子様、神島学院長補佐

第三期に重なるコロナ禍を乗り越え、四期目を迎えた2022年8月、私たちが待ち受けていたのは伊達先生の突然の訃報でした。驚きと悲しみに包まれ、途方に暮れましたが、それでも大きな混乱なく業務を遂行することができたのは、伊達先生の代わりに務められた矢野副研究院長（当時）のご尽力はもちろん、それまでに伊達先生が築いてこられたしっかりした運営の基盤があったからこそだと思います。

伊達先生は研究院長としての在職中、諸外国の大学に自ら出向き、部局間協定を精力的に締結し、国際共同研究及び学生交流の良い流れを創出されました。また、教員人事の透明化と研究活動を活発化させるための環境整備、若手人材の登用と育成にも注力されました。

その後、奥様から本研究院にご寄附をいただき、伊達先生が誰よりも大切にされてこられた将来の医療従事者の健やかな成長と保健科学研究の発展への精神を受け継ぎ、我々の使命である医療現場への優秀な人材供給を安定的に実現するため、「伊達広行基金」が創設されました。このたびの歩道の整備に、この基金の一部を使わせていただきました（図3）。基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力いただきましたみなさまに、関係者を代表しまして厚く御礼申し上げます。

伊達広行先生は今も、整備した歩道（通称:伊達ロード）を行き交う学生の成長を温かく見守り、保健科学研究院の発展を応援してくださっていることでしょう。

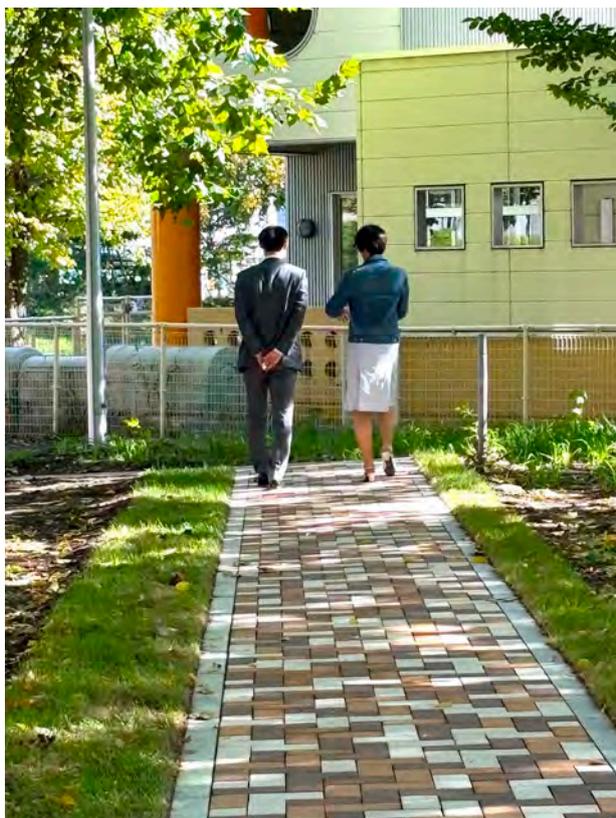


図2. 伊達ロードを歩く主賓の二人



図3. 歩道に埋め込まれた銘板

Hokkaido Summer Institute 報告 < 1 >

リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈 / Mina SAMUKAWA

2

2024年6月3日(火)～6月6日(金)に、Hokkaido Summer Institute「Healthy Aging with Exercises」を開講しました。この科目は、運動の多様な効果に関するエビデンスを紹介しながら学びを深め、国際的社会的健康課題解決に繋がるヘルシーエイジングについて考えることを目的に行いました。教員は、オーストラリアメルボルン大学保健医療歯科学部 理学療法学専攻主任の Fiona Dobson 教授を招へいし、本学からはリハビリテーション科学分野の寒川美奈教授、石田知也講師、越野裕太助教、井野拓実客員研究員(北海道科学大学 講師)が講義を担当しました。保健科学院、国際情報メディア・観光学院の大学院生合計9名が履修し、講義と演習により積極的な学びを深めました。演習では、三次元動作解析装置を用いてエイジングによる変形性関節症と歩行動作の解析を行い、最終

日にはヘルシーエイジングについてのリフレクションを交えて発表しました。今年度初めての開講でしたが、運動によるヘルシーエイジングへの効果を多様で国際的な視点から考え、学ぶことができる大変貴重な機会となりました。



Hokkaido Summer Institute 報告 < 2 >

健康科学分野 教授 池田 敦子 / Atsuko IKEDA

2

2025年6月9日(月)～12日(木)に、豪州クイーンズランド大学の Paul Jagals 教授を招いて Hokkaido Summer Institute「Environmental Health Science for Healthier Tomorrow (明日の健康のための環境衛生学)」を実施しました(北海道大学院共通授業と One Health フロントティア卓越大学院プログラム M301 の共同開講)。Jagals 教授との Hokkaido Summer Institute は 4 回目となり、今年からは講義と事例紹介およびディスカッションを組み合わせた講義になりました。12名が履修し、特に、Jagals 教授が取り組むフィジーやトンガなどの南太平洋諸島の島々が抱える水の衛生や汚染の課題について、実

際のケーススタディとして与えられた事例にどのような評価し、改善できるかを討論しました。

Jagals 先生にはこの機会に、保健学科看護学専攻3年生の環境保健の講義、また研究室ゼミの時間に話題提供をしていただき、誰もが美しい南の島のイメージが強い国々にある衛生課題について真剣に聞いていました。また、保健科学セミナーを第一回国際 CEHS 公開セミナーと共同開催し、“Research and Educational Training in Pacific Island”として、南太平洋諸島でどのように環境と健康課題の教育を進めていくかについて、話題提供と討論も行いました。今後より一層の教育・研究における連携が期待されます。



Hokkaido Summer Institute 履修生と



研究室メンバーとガッツポーズ

Hokkaido Summer Institute 報告 < 3 >

リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈 / Mina SAMUKAWA

2

2024年7月29日（火）～8月1日（金）に、「The Use of Motion Analysis and Biomechanics to Prevent Injuries and Enhance Performance in Sports」を開講しました。この科目は、スポーツ特有の疾患と受傷時の動作バイオメカニクスを学び、外傷・障害予防アプローチへの理解を深めることを目的に行いました。教員は、アメリカカリフォルニア州立大学サクラメント校保健福祉学部の Rafael Escamilla 教授を招へいし、本学リハビリテーション科学分野の寒川美奈教授、石田知也講師、越野裕太助教、井野拓実客員研究員（北海道科学大学 講師）、スポーツ医学診療センターの門間太助教が講義と演習を行い、保健科学院、生命科学院、国際情報メディア・観光学院の大学院生10名、社会人2名（理学療法士）が履修しました。スポーツ動作解析手法、アスリートの健康支援、エ

クササイズの実際について学び、多様な履修生のバックグラウンドでそれぞれが予防へのアプローチについて積極的に意見交換をできたことは、本学で本科目開講の意義を感じました。



Hokkaido Summer Institute 報告 < 4 >

共感力と判断力を育てるXRシミュレーション：Simmar+ESTE-SIMの挑戦

創成看護学分野 助教 コリー 紀代 / Noriyo COLLEY

約

10年間にわたり開発を続けてきた気管内吸引XRシミュレータESTE-SIM（エステシム：カテーテル操作に応じて生体反応をプロジェクション・マッピングで呈示し、技術の量的評価が可能なシミュレータ）と人工呼吸器訓練アプリSimmar（広島国際大学・二宮研究室開発）が統合され、「Simmar+ESTE-SIM」へと進化しました。Simmar+ESTE-SIMは、看護学・工学・情報科学・臨床工学の研究者の奇跡的な出会いと信頼関係を基盤に形成した分野横断型共同研究の成果である。2024年11月22日のプレスリリース後、国内外から多くの反響があり、米国、英国、フィン

ランド、スペインの研究者に対面・遠隔でご講演いただき、本サマーインスティテュートの開催が実現した。看護のみならず薬学や工学系の院生も参加し、本学OECのご協力を得て、ハイブリッド形式で実施した。XRやAIの活用により、臨床現場におけるOJTに依存せずに多様な症例や判断場面を再現可能となり、学生の共感力と対人能力を高められる。今後は、XRとAIの可能性を最大限に活かし、看護師特定行為研修の学部教育化を見据えながら、越境知による教育の質保証と国際連携を深め、社会貢献できればと考えている。本取り組みにご関心を寄せてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。



Simmar+ESTE-SIMの構成

Hokkaido Summer Institute 報告 < 5 >

リハビリテーション科学分野 教授 澤村 大輔 / Daisuke SAWAMURA

9

月2日(火)から5日(金)の4日間でHokkaido Summer Institute2024の開講科目である「Multidisciplinary team-based care for older adults」をハイブリット形式で実施しました。本科目は、世界の高齢者を支援する国際的チーム医療の高度実践を学ぶ機会を提供することを目的とした授業であり、部局間協定を締結しているメルボルン大学 医学・歯学・保健科学研究院との協働により開講されました。メルボルン大学からは Marianne Coleman 博士および Sandra Iuliano 博士を招聘し、対面での講義と討論を行いました。



また、Peter Lee 教授と Kwang Cham 准教授にはオンラインでご講義いただきました。本学からは矢野理香教授、長谷川直哉准教授、高島理沙講師、稲垣侑士助教が講義を担当しました。受講生は本学保健科学院の大学院生5名に加え、海外か

らの大学院生2名(英国、中国)の計7名でした。授業ではアクティブラーニングを積極的に取り入れ、学生が主体的に考え、英語でのコミュニケーションの機会を多く設けました。グループワークを通して活発な議論が展開され、異なる文化的背景や保健医療制度の枠組みをもつ学生同士の交流も深まりました。本授業は国際的な視野から高齢者の健康増進・予防戦略について理解を深め、今後のチームベースドケアの発展に貢献できる人材としての基礎を培う貴重な学びの場となりました。次年度は、さらに内容を充実させて開講を予定しています。

同窓会
だより

6

「今年の総会振り返り」

北大保健同窓会 会長 岡田 一範 / Kazunori OKADA

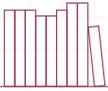
9月27日(土)のホームカミングデーと同時に、同窓会の総会が実施されました。総会に先立ち、本同窓会に多大なご尽力をいただいた藤本和則副会長のご逝去を悼み、参加者で黙祷を捧げました。その後、議案審議へと進み、終身会費の変更(3,000円)が可決されました。現在通っている学生の皆さんの負担が多少増えることとなりますので、その分還元できるように、学生の皆さんに有用な行事(OBとの交流会等)や必要な物品等を提供したいと考えております。このプラテュスが発行されている頃には、調査が終わって提供の手はずが整っているといいなと思います。名簿の整備も含め、同窓会として安定した運営ができるよう、保健学科の先生方の御協力もいただきながら、何とか良い方法を模索していきたいと考えています。

今年のホームカミングデーでは、「伊達ロード」の開通

式が行われ、我々も参加させていただきました。「みんなで歩けばそこが道になる」というのは、教育や研究に通じる部分かもしれませんね。来年度は北海道大学創基150周年とのことです。本同窓会も、この先50年、100年と続くよう、基盤づくりができればと思います。皆様の御協力をよろしくお願いいたします。



伊達ロードと開通式の様子



ミトコンドリアゲノムに対する放射線の遺伝性影響を発見 ～放射線健康リスク推定の高精度化と放射線防護体系の堅牢化に期待～

医用生理工学分野 准教授 福永 久典 / Hisanori FUKUNAGA

▶▶ [北大プレスリリース \[PDF\]](#)

論文情報

Environment International 196, 2025.

Radiation-induced impacts on mitochondrial DNA and the transgenerational genomic instability

Ryosuke Seino¹, Haruka Kubo², Kai Nishikubo¹, Hisanori Fukunaga^{1,3}

¹ Department of Biomedical Science and Engineering, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

² Department of Health Sciences, School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo, Japan

³ Center for Environmental and Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

DOI : [10.1016/j.envint.2025.109315](https://doi.org/10.1016/j.envint.2025.109315)

研究成果のポイント

ミトコンドリア DNA は、いわゆる「第二のゲノム」として、1962年にスウェーデンのストックホルム大学の Nass 夫妻によってニワトリ胚のミトコンドリアから発見されました。ヒトの場合、16,569塩基対の環状多コピーゲノムとして、一細胞あたり数十から数千のコピーがミトコンドリア内膜に接するようにして存在しています。そして、一つの細胞の中で、正常な配列を持つコピーと、変異のある配列を持つコピーが混在した「ヘテロプラスミー (heteroplasmy)」と呼ばれる状態にあります。本研究では、ヒト培養細胞とマウスを用いて、放射線被ばく後のミトコンドリア DNA コピー数とヘテロプラスミーの変化に着目しました。

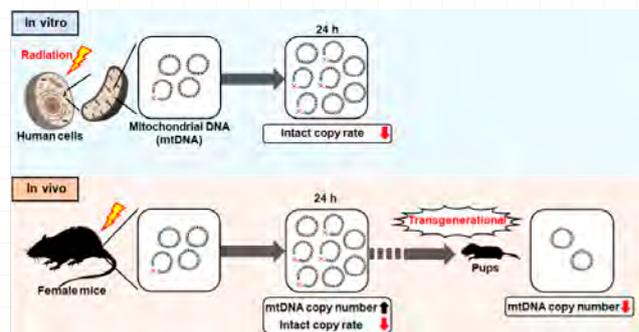
まず、ヒト子宮頸がん細胞である HeLa 細胞と、テロメラーゼ不活化正常線維芽細胞である BJ1-hTERT 細胞に対して、0.5～8Gy の X 線を照射しました。次に、8週齢の雌の C57BL/6N マウスに 2Gy の X 線を単回全身照射し、照射 1 日後に非照射の 8 週齢の雄マウスと交配させました。その後、照射した培養細胞と、雌マウス及び 2 週齢の仔マウスの血液から DNA を抽出し、リアルタイム定量 PCR 法を用いて、ミトコンドリア DNA コピー数と、X 線によって損傷されていない正常なミトコンドリア DNA コピーの比率を測定しました。

その結果、HeLa 細胞と BJ1-hTERT 細胞において、X 線照射 24 時間後に正常ミトコンドリア DNA コピー比率の有意な減少がみられました。また、X 線被ばくした雌マウスの末梢血においても、照射 24 時間後にミトコンドリア DNA コピー数の有意な増加と、正常コピー比率の有意な

減少がみられました。このようにヒト培養細胞 (in vitro) とモデル動物 (in vivo) の両方において、放射線被ばく後、ミトコンドリア DNA のヘテロプラスミーに急激な変化が生じることを見出しました。

さらに興味深いことに、妊娠前に X 線被ばくした母マウスから生まれた 2 週齢の仔マウスでは、血液由来ミトコンドリア DNA コピー数が有意に減少することを発見しました。私たちの知る限り、これはミトコンドリア DNA コピー数の制御において、放射線被ばくによる次世代影響を実証した初めての報告です。

マウスとヒトの種の差異などを慎重に考慮しなければなりません。私たちの発見は妊娠前女性とその次世代に対する放射線健康リスクの推定と防護体系に重要な示唆を与える可能性があります。ミトコンドリア DNA は母から子への遺伝を担う重要な分子群の一つですが、本研究の結果が示唆するように、母体の放射線被ばくなどの環境因子によって次世代におけるコピー数の制御が攪乱されてしまう可能性があります。このような影響がヒトでもみられるのかどうかも含めて、今後の更なる検証が求められます。





腎疾患における好中球の関与～好中球細胞外トラップを中心に～

病態解析学分野 教授 石津明洋 / Akihiro ISHIZU

▶▶ [北大プレスリリース \[PDF\]](#)

論文情報

Nature Reviews Nephrology 21(6): 383-398, 2025.

Neutrophils and NETs in kidney disease

Daigo Nakazawa¹, Sakiko Masuda², Yuka Nishibata², Kanako Watanabe-Kusunoki¹, Utano Tomaru³, Akihiro Ishizu²

¹ Department of Rheumatology, Endocrinology and Nephrology, Faculty of Medicine and Graduate School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo, Japan

² Department of Medical Laboratory Science, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

³ Department of Surgical Pathology, Hokkaido University Hospital, Sapporo, Japan

DOI : 10.1038/s41581-025-00944-3

URL : <https://rdcu.be/ed4rq>

研究成果のポイント

好 中球は末梢血白血球中の最多の免疫担当細胞で、これまで均質な細胞集団とみなされてきましたが、近年、異なる遺伝子発現プロファイルと免疫特性を持つ多様な細胞群であることが分かってきました。感染などの刺激により活性化された好中球は、刺激の種類とそれを受け取るサブセットの違いに応じ、サイトカイン、ケモカイン、タンパク分解酵素、活性酸素、好中球細胞外トラップ (neutrophil extracellular traps : NETs) など様々な生理活性物質を放出します。

このうち NETs は、脱凝縮した DNA と抗菌タンパクで構成されており、生体内に侵入した病原微生物を細胞外で捕捉・殺菌する重要な自然免疫機構の一つです。NETs は生体防御に不可欠である一方、その細胞毒性、血栓形成性、自己抗原性のために自己損傷のリスクも有しています。

好中球の主要なサブセットである NDG (normal-density granulocyte : 正比重顆粒球) は、各種刺激に応じて様々な形態の NETs を放出します (図 1)。

その中には、NETs の主成分である DNA が核に由来するものやミトコンドリアに由来するもの、NETs 放出に伴い細胞死に至るものや至らないものがあり、これらの現象を引き起こす経路も様々です。

本総説では、糸球体毛細血管壁の病理学的変化が腎内への好中球浸潤を促進し、浸潤した好中球は NETs を放出することで腎臓に存在する細胞、特にメサンギウム細胞や糸球体上皮細胞と相互作用し、急性腎障害、血管炎、全身性エリテマトーデス、血栓性微小血管障害、慢性腎臓病といった腎臓が障害される様々な病態の形成に関与していることを詳述しました。

腎疾患の病態形成における好中球と NETs の役割を理解することは、好中球の活性化と NETs を標的とした腎疾患に対する新しい治療戦略の開発につながります。



著者近影 (2025年4月)
(左から) 益田紗季子講師、西端友香講師、石津明洋教授、中沢大悟講師 (医学研究院)、楠加奈子助教 (医学研究院)、外丸詩野准教授 (北海道大学病院)

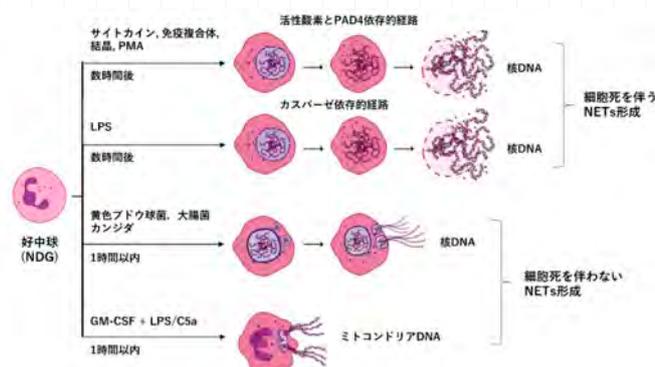


図1. 多様な好中球細胞外トラップ (NETs)

好中球の主要なサブセットであるNDGは、各種刺激に応じて、様々な形態のNETsを放出する。その中には、NETsの主成分であるDNAが核に由来するものやミトコンドリアに由来するもの、NETs放出に伴い細胞死に至るものや至らないものがあり、これらの現象を引き起こす経路も多様である。

PMA (phorbol myristate acetate) : ホルボールミリステートアセテート

LPS (lipopolysaccharide) : リポ多糖

GM-CSF (granulocyte-macrophage colony-stimulating factor) : 顆粒球-単球コロニー刺激因子

C5a (complement 5a) : 補体C5a



統合失調症者のリアルな運転行動を世界で初めて捉える試み ～安全運転への新たな視点～

リハビリテーション科学分野 助教 岡田 宏基 / Hiroki OKADA

▶▶ [北大プレスリリース \[PDF\]](#)

論文情報

Schizophrenia (NPJ Schizophrenia)

Characteristics of real-world driving behavior in people with schizophrenia: a naturalistic study utilizing drive recorders

Hiroki Okada¹, Saki Komagata², Mayu Takagi², Yuichi Kamata³, Junichi Matsumoto⁴, Takaya Maeyama⁵, Yukiko Takashio⁶, Masaki Matoba⁶

¹ Department of Rehabilitation Sciences, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

² Medical Corporation Muroi Hospital, Ohtawara, Japan

³ Social Welfare Service Corporation Bois de Boulogne, Sano, Japan

⁴ Social Welfare Service Corporation Hamagiku, Hitachinaka, Japan

⁵ Graduate School of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

⁶ Medical Corporation Fukuroda Hospital, Daigo, Japan

DOI : [10.1038/s41537-025-00613-1](https://doi.org/10.1038/s41537-025-00613-1)

研究成果のポイント

統合失調症者の運転の特徴を「実生活のデータ」で明らかに

自 動車運転は、都市部から地方まで人々の生活を支える重要な移動手段です。特に公共交通機関が十分でない地域では、自家用車が生活の基盤となっています。しかし、統合失調症を有する人々にとって、認知機能の特性や服薬による副作用などから、運転に対して不安を感じるものが少なくありません。さらに、「統合失調症の人は危険」といった社会的偏見が根強く、運転免許の取得や更新、さらには就労や地域活動への参加に不利な影響を及ぼすことが報告されています。

また、家族や医療者の慎重な助言を受けて、本人が「自分は運転を控えるべきではないか」と考え、運転を諦めてしまうケースもあります。こうした背景には、社会的スティグマだけでなく、自身の中に生じる「セルフスティグマ（自己への偏見）」が関与していると考えられます。

これまでの研究の多くは、運転シミュレーターを用いた実験室内の評価にとどまっており、日常生活における実際の運転行動を科学的に捉えた研究はほとんどありませんでした。そこで本研究では、ドライブレコーダーを活用して、統合失調症のある人が実際にどのような運転を行っているのかを明らかにすることを目的としました。

「危険」ではなく「慎重」—実データが示す新たな姿

研 究では、統合失調症を有する 20 名と比較群 20 名を対象に、各人 500km 分の運転を記録しました。ドライブレコーダーにより、車外・車内映像、GPS による速度や位置情報、加速度センサーによる急ブレーキや急ハンドルのデータを収集しました。さらに、注意機能や抑制機能などの認知検査、精神症状 (PANSS)、抗精神病薬の副作用として知られる錐体外路症状 (DIEPSS) も評価し、運転行動との関連を多角的に分析しました。

その結果、統合失調症者は平均速度・最高速度が有意に低く、速度超過やスマートフォン操作などの違反行動が少ないことが分かりました。(図 1 参照) これは、リスクを避ける慎重な運転傾向を示唆しています。一方で、注意力を測る「有効視野 (UFOV)」が低い人では、信号無視や一時停止違反などの“注意関連違反”が増加しており、注意機能の低下が運転上の課題と関係することが明らかになりました。さらに、急ブレーキの多さは運転速度とは無関係であり、薬の副作用である錐体外路症状が影響している可能性も示されました。(図 2 参照)

本研究は、統合失調症のある人の運転行動を実データで初めて体系的に示したものであり、「危険である」という一面的な見方に対し、より科学的で公平な理解を促す



研究発表

成果です。今後は、認知機能や副作用などの個別要因を踏まえた運転支援やリハビリテーションの開発が期待されます。こうした取り組みは、安全運転の継続だけでなく、

統合失調症を有する人々の社会参加や生活の質の向上にもつながるものです。

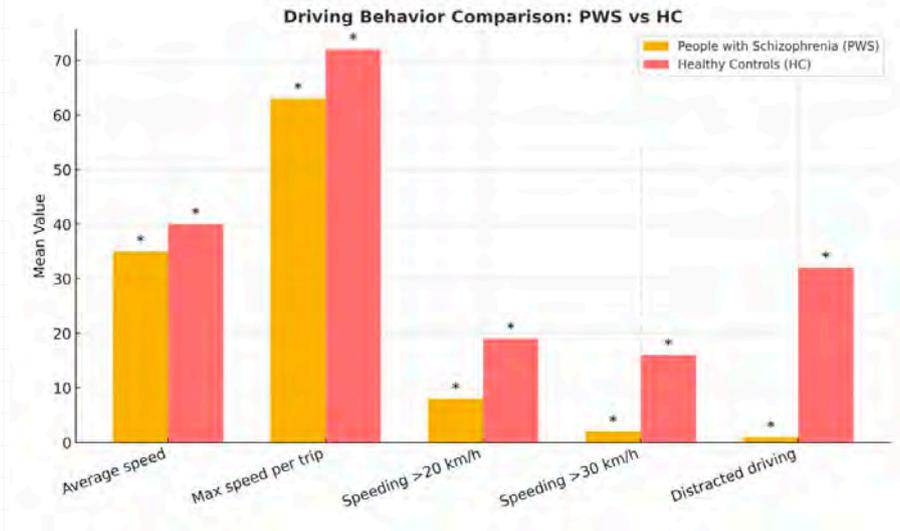


図1. 統合失調症者と健常者の運転/違反行動の比較
 「*」は有意差あり ($p < 0.05$) を示す。
 PWS：統合失調症者、HC：比較対象群統合失調症者は、「平均速度」および「一回あたりの運転における最高速度」が比較対象群よりも遅く、「スピード違反」や「わき見運転」の頻度も有意に少ない傾向がみられた。

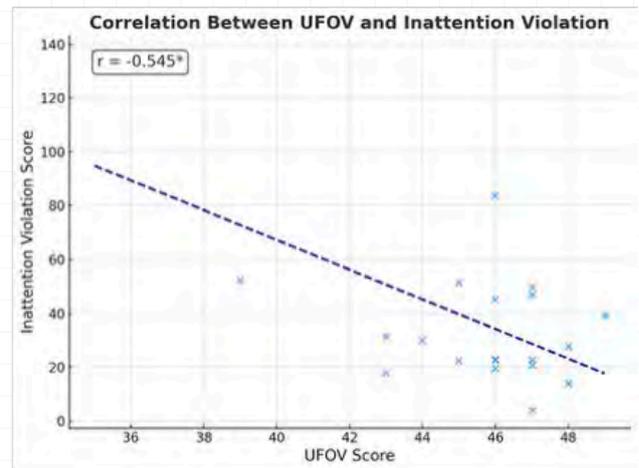
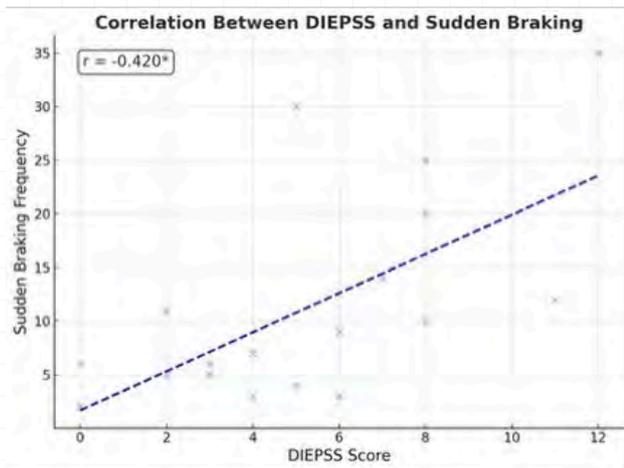


図2. 認知機能及び薬剤副作用と運轉行動との相関

(左) DIEPSS スコアと急ブレーキ頻度の相関
 錐体外路症状を示す DIEPSS スコアが高い人ほど、急ブレーキの頻度が多くなる傾向がみられた ($r = -0.420^*$)

(右) UFOV スコアと不注意運轉違反スコアの相関
 視覚的な注意力を示す UFOV スコアが低い人ほど、信号無視や一時停止違反などの注意運轉違反が多い傾向がみられた ($r = -0.545^*$)



皮膚エリテマトーデスの病態に『細胞老化』が関与

リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子 / Takako CHIKENJI

▶▶ [北大プレスリリース \[PDF\]](#)

論文情報

Arthritis & Rheumatology

HLA class I-downregulated senescent epidermal basal cells orchestrate skin pathology in cutaneous lupus erythematosus

Sena Yamamoto¹, Yuki Saito^{2,3}, Tsukasa Sato¹, Seina Nakano⁴, Dain Kasseki¹, Ayaka Nagao¹, Norihiro Miura¹, Kentaro Nagaoka³, Arisa Kita³, Maki Miyajima¹, Shogo Ijima⁵, Koji Taniguchi⁶, Atsushi Niida⁷, Takako Chikenji⁸¹ Graduate School of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan² Graduate School of Health and Medical Sciences, Sapporo Medical University School of Health Sciences, and Department of Anatomy, Sapporo Medical University School of Medicine, Sapporo, Japan³ Department of Health Sciences, School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo, Japan⁴ Department of Anatomy, Sapporo Medical University School of Medicine, Sapporo, Japan⁵ Department of Oral Surgery, Sapporo Medical University School of Medicine, Sapporo, Japan⁶ Department of Pathology, Faculty of Medicine and Graduate School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo, Japan⁷ Human Genome Center, The Institute of Medical Science, The University of Tokyo, Tokyo, Japan⁸ Department of Rehabilitation Science, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, JapanDOI : [10.1002/art.43244](#)

IF : 10.9 RHEUMATOLOGY カテゴリーランキング 6.9%

研究成果のポイント

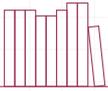
皮膚エリテマトーデス (CLE) は、顔や首などに特徴的な赤い発疹 (紅斑) が現れる疾患で、全身性エリテマトーデス (SLE) と呼ばれる、全身の様々な臓器に慢性炎症を起こす自己免疫疾患の症状の一つとして出現することがわかっていますが、原因はわかりません。

細胞老化は DNA ダメージなどに応答して生じる細胞の現象で、慢性炎症を生じる加齢関連性疾患やエイジングとの関連性が報告されています。老化細胞は細胞老化随伴分泌形質 (SASP) と呼ばれる特徴を持ち、サイトカインやケモカインなど様々な生理活性物質を産生することで、免疫細胞を動員します。通常、老化細胞はこれら免疫細胞によって除去されることがわかっています。しかし、老化細胞が除去されずに蓄積し、慢性炎症を引き起こすことが報告され、なぜ老化細胞が除去されずに残るのか詳細は明らかになっていません。

CLE 病態でも老化細胞の関与が推測されていますが、どのような特徴をもつ老化細胞が存在しているのか、自己を攻撃する免疫細胞との関わりがあるのか、明らかになっていませんでした。そこで本研究では、CLE の老化細胞

と免疫細胞を解析し、老化細胞の病態メカニズムへの関与を検証しました。

方法は、CLE 患者およびマウスモデルの皮膚サンプルを用いて、個々の細胞 (単一細胞) レベルで網羅的な遺伝子発現を解析し、老化細胞と正常表皮細胞、免疫細胞がどのように細胞間でコミュニケーションを形成しているのか、細胞間相互作用の解析を行いました。結果、老化細胞が産生するサイトカインの一つである I 型インターフェロンが正常皮膚の細胞に作用すると、細胞の表面にある目印 (HLA- クラス I) が増加しました (図 1)。これにより、正常な皮膚の細胞が免疫細胞 (細胞傷害性 T 細胞) から攻撃されやすくなり、自己を攻撃対象とする可能性が考えられました。一方で、老化細胞は自身が分泌する因子 (EGFR リガンド) の作用によって、目印 (HLA- クラス I) の発現を低下させ、免疫細胞の攻撃から逃れている可能性が推測されました (図 2)。老化細胞が中心となって自己を免疫細胞が攻撃する病態を形成していると推測されたことから、CLE モデルマウスに老化細胞除去薬として知られるフィセチンを経口投与し、老化細胞が除去された時の SLE 皮膚病変への影



響を検討しました。すると、攻撃性の高い免疫細胞の数が低下し、慢性炎症が軽減されることがわかりました。これらの研究成果によって、CLE では自己を攻撃するメカニズムに老化細胞が関与している可能性が示唆されました。今後は、なぜ CLE で老化細胞が出現するのか、未

だ解明されていない発症原因の解明につながることを期待されます。さらにこれら発症・病態メカニズムのさらなる解明によって、将来的には老化細胞を標的とした治療開発へと発展することが期待されます。

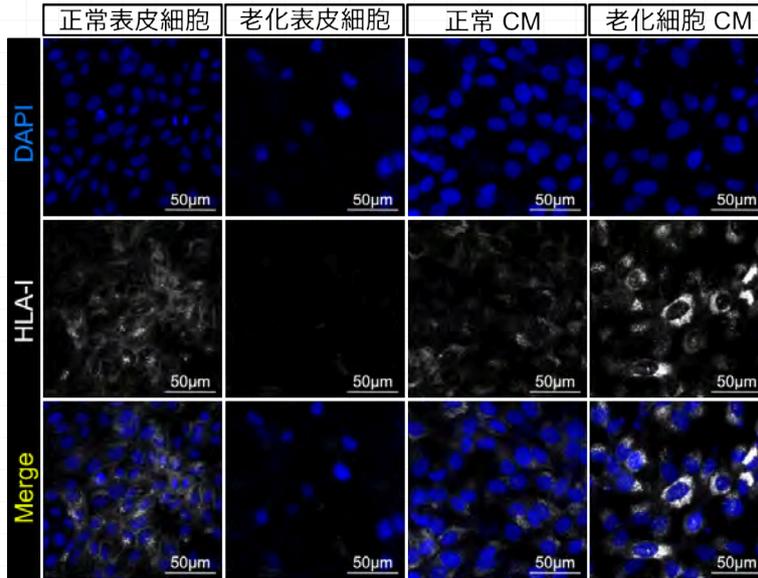


図1. 老化細胞は表面にある目印(HLA-I)の発現を正常細胞より低下させる。さらに、老化細胞が産出する分泌物(老化細胞 CM)で正常細胞を刺激すると、正常細胞の HLA-I の発現が高くなる。
CM : Conditioned Medium (細胞の分泌物が含まれる細胞培地)

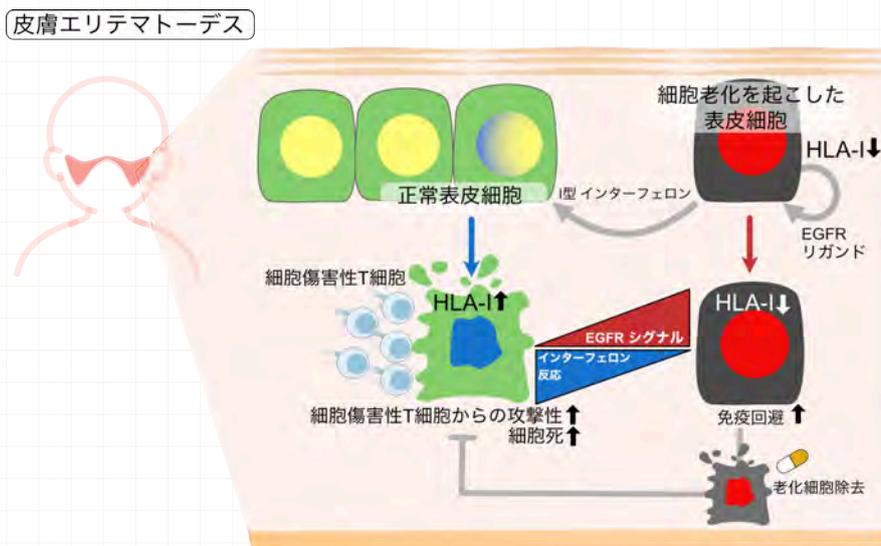
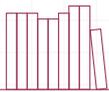


図2. 老化細胞は I 型インターフェロンを産生して、正常細胞の表面にある目印 (HLA-I) の発現を高め、免疫細胞 (細胞傷害性 T 細胞) の攻撃性を高めることがわかった。



ジャンプ着地におけるアキレス腱負荷を効果的に減らす指導法を発見 - 股関節屈曲がカギ ～アキレス腱障害の予防やリハビリテーションへの応用に期待～

リハビリテーション科学分野 助教 越野 裕太 / Yuta KOSHINO

▶ [北大プレスリリース \[PDF\]](#)

論文情報

Knee Surgery, Sports Traumatology, Arthroscopy

Effects of Landing Instructions on Achilles Tendon Load: Emphasizing Hip Flexion as the Optimal Strategy

Yuta Koshino, Mina Samukawa, Tomoya Ishida, Harukazu Tohyama

Department of Rehabilitation Sciences, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University, Sapporo, Japan

DOI : [10.1002/ksa.70006](https://doi.org/10.1002/ksa.70006)

研究成果のポイント

アキレス腱障害（アキレス腱症など）は、ジャンプ着地やランニングといった繰り返しの高負荷運動が発症の誘因となり得ます。スポーツ選手に限らず一般の人々にも発生し、疼痛や再発によって活動制限が長期化しやすい疾患です。アキレス腱障害の予防や発症後のリハビリテーションでは、アキレス腱にかかる負荷（Achilles tendon load）を適切に管理しながら運動することが重要とされています。しかし、どのようなジャンプ着地の指導が腱負荷を効果的に低減できるのかは明らかにされていませんでした。本研究では、複数の着地指導がアキレス腱負荷に与える影響を検討し、臨床やスポーツの現場で活用できる効果的な指導方法を明らかにすることを目的としました。

健康成人 23 名を対象に、ドロップ・パーティカル・ジャンプを実施しました。この動作の着地時に、何も指導しない「自然着地」に加え、「股関節を深く曲げる」「膝関節を深く曲げる」「静かな着地（着地音を抑える）」「足底の荷重位置を後方へ寄せる」という五つの指導条件を設定しました（図 1）。三次元動作解析システム及び床反力計を用いて、アキレス腱負荷の最大値と増加速度、床反力、下肢関節角度を算出し、指導条件間で比較しました。

すべての指導条件で、アキレス腱負荷の最大値は減少し



図1. 着地指導条件.

ました（図 2）。特に「股関節を深く曲げる」指導では他の指導よりも大きく減少しました。また、この指導ではアキレス腱負荷の増加速度も減少しました。「静かな着地」もアキレス腱負荷の最大値と増加速度を低下させましたが、その効果は「股関節を深く曲げる」指導ほど大きくはありませんでした。一方、「足底の荷重位置を後方へ寄せる」指導では負荷の最大値は減少しましたが、アキレス腱負荷の増加速度や床反力はむしろ増加し（図 2）、衝撃の強い着地となることで他の外傷・障害リスクを高める可能性が示唆されました。総合すると、着地指導によってアキレス腱負荷を調整することが可能であり、腱負荷の低減を目的とする場合には股関節を深く曲げる指導が最も有効であると考えられます。

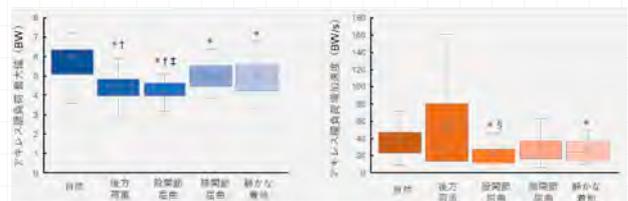


図 2. アキレス腱負荷の最大値（左グラフ）とアキレス腱負荷増大速度（右グラフ）の各指導条件による違い。
* は自然条件より有意に低値、† は静かな着地条件より有意に低値、‡ は膝関節屈曲条件より有意に低値、§ は後方荷重条件より有意に低値であることを示す。

本研究成果から、股関節を深く曲げる着地指導は、安全なアキレス腱負荷の管理と障害予防に有効である可能性が示されました。さらに、アキレス腱障害患者に対するリハビリテーションにおいて、具体的な運動療法の指導法として応用されることが期待されます。

【謝辞】本研究は、公益財団法人ミズノスポーツ振興財団の助成を受けて実施されました。

地域とつながる新しい北大のかたち：中庭プロジェクト

地域共生モデル創発分野責任者 矢野 理香 / Rika YANO

令和6年度部局評価配分事業「各部局の強み・特色に対する評価」の採択を受けて始まった『障害者や認知症高齢者等との協働に基づく地域共生社会モデル形成のための環境準備』（通称：中庭プロジェクト）は、令和7年4月からは、寄附分野「地域共生モデル創発分野」として継続しています。本プロジェクトは、保健科学研究院にある荒れ放題の中庭を学生、教職員とともに地域の方や障害者が協働して整備することを通し、北海道大学における実践的な地域共生社会モデルを作ることを目的としています。昨年度は、同窓会から中庭の芝生エリアの整備費を寄附いただき、芝生を整備することができました。

令和7年4月には、専任教員：片岡義明特任助教が着任し、研究院内教員13名が地域住民と学生とともに互いに助け合いながら活動しています。中庭に来て活動をする時には、地域住民、学生、教員などの立場は関係なく、皆「ともだち」となって、知恵を出し合いながら、楽しく活動を進めています。昨年度は合計7回、今年度は合計9回の中庭プロジェクトイベントを開催し、11月までの参加者は1000名を超えました。今年度のイベントは、第1回（5月14日）：畑の土おこしと清掃作業、第2回北大祭（6月8日）：健康測定・子ども縁日・中庭紹介（500人以上の来訪）、第3回（6月11日）：苗植えと恵先生による健康セミナー「丈夫に生きるための暮らしのギアチェンジ」、第4回（7月9日）：畑づくりと地域の参加者に

よる戦争体験の講演、第5回（7月13日）：「NPO 法人 あえりあ」との合同イベントで重度障害を持つお子さんとご家族とのラベンダーの刈り取りと北大散策、第6回（8月20日）：野菜の収穫と Divyavani 先生によるカレー教室と試食、第7回（9月26日）：芋ほり体験・試食と北大の伐採木である白樺を再利用したテーブル・ベンチの設置、第8回（10月18日）：中庭整備と中庭楽団（山内教授：ギター担当と蝦名教授：ピアノ担当）による音楽会、第9回（11月8日）：お疲れ様会を行いました。特に、北方生物圏フィールド科学センター技術専門職員の林忠一さん、株式会社やまもく様のご支援のもと、設置された北大の白樺を使ったテーブル・ベンチは、地域住民、保育園の子どもたち、学生たちが思わず撫でてしまうような温かみのあるものとなりました。この他にも、週に1回、ラジオ体操を始めました。

最近では、日常的にも地域住民が中庭に訪れて下さり、今後の計画を考えてくれるなど、住民参加型のかたちができつつあります。今後は、さらに他学部や他部門、学生サークルとの交流も予定をしており、中庭から始まった活動がどのような広がりや深まりを創造できるのか、ワクワクを楽しみながら、参加者一同、ともに活動を進めていきたいと思っております。詳細については、[Instagram](#)、[X](#)、[保健科学研究院ホームページ](#)で随時更新していますので、ご覧ください。



報告事項

保健科学研究院共催等イベントの実施状況（令和7年3月～令和7年10月）

イベント名	開催日	分類	保健科学研究院以外の主催・共催等組織
GCF 国際シンポジウム "Sustainability in Agriculture, Food and Health"	2025.9.22	共催	北海道大学農学研究院 GCF (Global Center for Food, Land and Water Resources)
第90回日本健康学会総会	2025.10.11-12	共催	日本健康学会 環境健康科学研究教育センター

保健科学セミナーの実施状況（令和7年4月～令和7年10月）

開催回	開催日	講演タイトル	講師
2025年度 第1回	2025.6.25	術前には「筋肉」と「腸」を鍛えましょう～プレハビリテーションとシンバイオティクスの有用性～	横山幸浩 教授（名古屋大学大学院医学系研究科）
第2回	2025.6.5	Loneliness, Belonging, and Group Dynamics: A Social Identity Approach	Daniel Martin, PhD Candidate Prof. Clifford Stevenson （ノッティンガム・トレント大学）
第3回	2025.6.12	Research and Educational Training in Pacific Island (tentative)	Prof. Paul Jagals (クイーンズランド大学)
第4回	2025.7.4	Early life exposure to arsenic and other metals and the associated health risk	Dr. Shu-Li Julie Wang (台湾国家衛生研究院)
第5回	2025.7.8	Improvement of indoor environment quality of vulnerable people under VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity)	若林 齊 准教授、李相逸 助教（北海道大学工学研究院）、池田 敦子 教授、曾怡 特任助教（北海道大学保健科学研究院）、Dr. Tandy Hastings-Ison、Kelly Graydon 准教授、Masa Noguchi 准教授（メルボルン大学）、Sajal Chowdhury 教授（チッタゴン工科大学）、石川 祥平氏（株式会社オリエンタルコンサルタンツグローバル）
第6回	2025.7.14	放射線の生体影響とトリチウム処理水の調査研究～400匹の魚たちと原子力規制人材育成～	小畑 結衣 助教（茨城大学 基礎自然科学野）
第7回	2025.9.18	北海道の地域医療を創る：ACPを通じて肺がん手術患者を地域全体で支える医療を目指して	三浦朋美 先生（函館五稜郭病院看護部 部長） 上原浩文 先生（函館厚生院五稜郭病院呼吸器外科 診療部長）

FD研修の実施状況（令和7年度）

開催日	区分	講演内容	講師
令和7年度	保健学科 / 保健科学院	“AI前提”のカリキュラム・授業デザインを考えるために	北海道大学 高等教育研修センター 副部門長 立花 優 氏

保健科学研究院研究推進対象論文対象者（令和7年3月～令和7年10月）

所属分野	職名	氏名	備考
健康科学分野	講師	吉村 高明	1編
病態解析学分野	助教	Dya Fita Eddy DIBWE	1編（内20%以内1編）
健康科学分野	助教	秦 葳	1編
リハビリテーション科学分野	助教	稲垣 侑士	2編
基盤看護学分野	教授	矢野 理香	1編
基盤看護学分野	教授	鷲見 尚己	1編
基盤看護学分野	助教	吉村 舞	1編
創成看護学分野	教授	蝦名 康彦	1編（内20%以内1編）
創成看護学分野	助教	日野 真莉絵	1編
医用生体理工学分野	准教授	杉森 博行	4編
医用生体理工学分野	准教授	福永 久典	4編
医用生体理工学分野	講師	松谷 悠佑	2編
医用生体理工学分野	助教	堤 香織	1編
病態解析学分野	教授	山口 博之	1編
病態解析学分野	教授	恵 淑萍	4編（内20%以内3編）
病態解析学分野	教授	石津 明洋	1編
病態解析学分野	准教授	加賀 早苗	1編
病態解析学分野	助教	村山 迪史	1編
病態解析学分野	助教	陳 一凡	1編（内20%以内1編）
リハビリテーション科学分野	教授	千見寺 貴子	1編（内10%以内1編）
リハビリテーション科学分野	教授	澤村 大輔	1編
リハビリテーション科学分野	教授	寒川 美奈	3編
リハビリテーション科学分野	准教授	長谷川 直哉	1編
リハビリテーション科学分野	講師	吉田 一生	1編
リハビリテーション科学分野	講師	高島 理沙	4編
リハビリテーション科学分野	助教	岡田 宏基	2編（内10%以内1編）
リハビリテーション科学分野	助教	越野 裕太	2編（内10%以内1編）
健康科学分野	教授	小笠原 克彦	4編
健康科学分野	教授	山内 太郎	3編（内20%以内1編）
健康科学分野	教授	池田 敦子	3編（内10%以内3編）
健康科学分野	特任助教	趙 捷宇	2編
食品機能解析・保健栄養学分野	特任講師	何 欣蓉	1編（内20%以内1編）

【研究推進対象論文】

- 対象：(1) 英文原著論文（査読有、IF有、first author）を執筆した教員
 (2) 英文原著論文（査読有、IF有）の corresponding author となった教員
 ※ ただし、(1)に該当する論文の corresponding author となった教員は除く

令和7年度科学研究費（文部科学省・日本学術振興会）採択一覧

研究種目	新規/継続	氏名	分野・職名	研究課題
学術変革領域研究(A)	継続	高島 理沙	リハビリテーション科学分野 講師	性的少数者の保健医療者がもつ物語性：専門職性の発達における影響
基盤研究(A)	継続	山内 太郎	健康科学分野 教授	排泄人類学の創出：排泄の自然誌と人類誌、サンニーションと健康
	新規	池田 敦子	健康科学分野 教授	プラスチック添加剤によるエピゲノム変化と健康影響：ヒトと細胞の融合的アプローチ
基盤研究(B)	継続	矢野 理香	基盤看護学分野 教授	看護職の離職予防と就業意欲向上を目指す看護管理データベース開発と利活用の有効性
	継続	田高 悦子	創成看護学分野 教授	独居高齢者の社会的孤立・孤独予防に向けた民産官学共創×日英GGPモデルの社会実装
	継続	石川 正純	医用生体理工学分野 教授	BaTiO3 誘電体の放射線応答メカニズムの解明と超高密度多次元線量計への応用

研究種目	新規/継続	氏名	分野・職名	研究課題
基盤研究 (B)	継続	福永 久典	医用生体理工学分野 准教授	空間分割照射後の精巣組織代償効果の解明・制御と数理モデル開発
	継続	松谷 悠佑	医用生体理工学分野 講師	放射線飛跡構造の空間パターンに基づく DNA 損傷予測システムの開発
	新規	山口 博之	病態解析学分野 教授	癌細胞との類似性から紐解く性器クラミジアの低酸素適応と細胞修飾機構の新たな展開
	新規	田村 彰吾	病態解析学分野 准教授	巨核球サブタイプ分化の時空間制御をもたらず骨髄間質環境の解明
	継続	前島 洋	リハビリテーション科学分野 教授	薬理的神経制御が支える新たな脳卒中再生リハビリテーションの探求
	継続	千見寺 貴子	リハビリテーション科学分野 教授	老化細胞の運命決定機構から解明する関節リウマチ病態メカニズムと関節再生戦略
	継続	吉田 一生	リハビリテーション科学分野 講師	統合失調症患者のメタ認知、努力回避行動、臨床症状との相互関連に関する研究
	継続	横澤 宏一	健康科学分野 教授	コミュニケーションを支える広汎な社会認知機能の神経基盤の探究
	継続	石田 知也	リハビリテーション科学分野 講師	骨盤コントロールに着目した膝前十字靭帯再建術後の代償的運動制御メカニズムの解明
	継続	鷲見 尚己	基盤看護学分野 教授	当事者評価による在宅高齢がん患者の栄養サポートニーズの解明と外来ケアモデルの検討
	新規	野路 武寛	基盤看護学分野 教授	肝表面で得られる ICG 蛍光強度の変化を用いた肝機能を測定する新規診断法の探索
	継続	佐藤 三穂	基盤看護学分野 准教授	前立腺がん患者のアンメットニーズの解決により意思決定を支える看護介入モデルの構築
	継続	松澤 明美	創成看護学分野 准教授	障がいのある子どもの家族との共創による価値観に基づく子育て支援モデルの開発
	基盤研究 (C)	新規	田中 裕子	創成看護学分野 助教
継続		杉森 博行	医用生体理工学分野 准教授	AI による進化的知識更新を有したクラウドベースの診断補助システムの開発
継続		高島 弘幸	医用生体理工学分野 准教授	ミトコンドリア機能および筋細胞内脂肪に着目した疼痛発生メカニズムの解明
継続		堤 香織	医用生体理工学分野 助教	悪性神経膠芽腫の放射線抵抗性におけるニューロピリン1の役割と機能解明
継続		恵 淑萍	病態解析学分野 教授	新規抗酸化物質の糖尿病性腎症の有効性に関する研究
新規		加賀 早苗	病態解析学分野 准教授	肺高血圧症早期診断のための新たな心エコー診断マーカーの確立
新規		櫻井 俊宏	病態解析学分野 准教授	健康維持戦略のための酸化変性 apoAI と脂肪性肝炎との関連解明
新規		大久保 寅彦	病態解析学分野 講師	パンデミッククローン ST131 をモデルとした大腸菌臨床株の乾燥抵抗性メカニズムの解明
新規		益田 紗季子	病態解析学分野 講師	分解抵抗性を示す好中球細胞外トラップを標的とした ANCA 関連血管炎の新規治療開発
継続		澤村 大輔	リハビリテーション科学分野 教授	慢性期外傷性脳損傷患者における認知機能トレーニングプログラムの確立
継続		寒川 美奈	リハビリテーション科学分野 教授	寒冷環境におけるダイナミックストレッチが筋腱力学的特性へ与える影響
継続		笠原 敏史	リハビリテーション科学分野 助教	高齢者の運動学習理論に基づく筋力調整トレーニングの開発
継続		越野 裕太	リハビリテーション科学分野 助教	認知機能が膝および足関節の靭帯損傷リスクに及ぼす影響とその機序の解明
新規		小笠原 克彦	健康科学分野 教授	全道国保等レセプトデータベースによる疾患医療費構造の可視化と将来予測
新規	Bomme Gowda SIDDABASAVE GOWDA	健康科学分野 准教授	Targeting sphingomyelin synthase inhibition for fatty liver disease control using paprika extracts	
挑戦的研究(開拓)	継続	山内 太郎	健康科学分野 教授	子どもたちと一緒に創る地域のサニテーション
挑戦的研究(萌芽)	継続	近藤 祥子	創成看護学分野 准教授	生殖医療における基礎科学研究がもたらす研究成果の認識と医療職学生の死生観の育成
	継続	千見寺 貴子	リハビリテーション科学分野 教授	老化起源細胞から解明する Healthy aging と加齢性疾患の分岐点

研究種目	新規/継続	氏名	分野・職名	研究課題
若手研究	継続	吉村 高明	健康科学分野 講師	前立腺癌に対する MR-Only 尿導線量低減陽子線治療計画技術の開発
	新規	稲垣 侑士	リハビリテーション科学分野 助教	パーキンソン病における AI 動作解析による定量的な ADL 評価の確立
	新規	穴戸 穂	基盤看護学分野 助教	新人看護職者への夜勤適応に向けたセルフモニタリング支援プログラムの開発
	新規	安田 佳永	基盤看護学分野 特任助教	末梢静脈留置針挿入の成功率向上を目指す血管選択技術習得プログラムの開発
	継続	岩田 由香	創成看護学分野 講師	高次脳機能障害者家族介護者の“地域基盤の SHG 主体×ICT 活用プログラム”の開発
	継続	我妻 慧	医用生体理工学分野 准教授	タウ PET 標準化を目指した新しいファントムの開発と全国展開
	新規	仲本 宗泰	医用生体理工学分野 助教	線量バイオマーカーに基づく放射線治療モダリティ横断的アウトカム解析
	継続	西端 友香	病態解析学分野 講師	ホスファチジルセリン依存性抗プロトロンビン抗体の好中球細胞外トラップ誘導能の解明
	継続	村山 迪史	病態解析学分野 助教	新規低侵襲治療の普及にむけた 3 次元イメージングによる三尖弁逆流の重症度診断法開発
	継続	堀 生実	病態解析学分野 特任助教	運動療法によるミトコンドリア機能制御を介した新規リハビリテーションの探求
	継続	長谷川 直哉	リハビリテーション科学分野 准教授	温熱療法を用いた姿勢不安定性に有効な新たな介入方法の考案
	継続	宮島 真貴	リハビリテーション科学分野 講師	細胞老化に着目した自閉スペクトラム症の病態解明と新規治療探索
	継続	岡田 宏基	リハビリテーション科学分野 助教	精神障害者の自動車運転～症状の縦断的变化に対応した運転能力評価法、支援法の開発～
	継続	岡 優一郎	リハビリテーション科学分野 助教	マクロファージの賦活が創傷治癒メカニズムを介して軟骨代謝へ与える影響の探索
	研究活動スタート支援	継続	片岡 義明	地域共生モデル創発分野 特任助教
継続		稲垣 侑士	リハビリテーション科学分野 助教	筋電図誘発刺激を組み合わせた鏡視覚フィードバックによる神経可塑性の解明
継続		出塚 望	基盤看護学分野 助教	妊娠期からの睡眠特徴および随伴症状が産後うつ状態の経時的変化に与える影響
継続		安田 佳永	基盤看護学分野 特任助教	高齢患者の末梢静脈留置針挿入において静脈拡張を促す温電法ベストプラクティスの確立
継続		小林 后	創成看護学分野 助教	労働者の治療と仕事の両立支援に向けた産業看護職のための多職種連携モデルの開発
新規		日野 真莉絵	創成看護学分野 助教	妊婦看護職における周産期異常予防のための自己管理支援プログラムの開発
継続		曾 怡	健康科学分野 特任助教	学童の甲状腺ホルモンかく乱に与える日常生活からのリン系難燃剤の複合曝露の影響解明
研究成果公開促進費 (研究成果公開発表(B))	新規	山口 博之	病態解析学分野 教授	ようこそ不思議な細菌の世界へ！身の周りで共に生きる細菌の生存戦略について
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B))	継続	池田 敦子	健康科学分野 教授	ベトナムの非正規 E-waste 処理地域における健康調査
国際共同研究加速基金 (海外連携研究)	継続	澤村 大輔	リハビリテーション科学分野 教授	日豪協働による健康寿命延伸のための健康増進・予防支援戦略の開発と実装

共同研究、受託研究、学術コンサルティングの受入状況（令和7年10月時点）

所属・職名・氏名	件数	所属・職名・氏名	件数
基盤看護学分野 教授 矢野 理香	共同研究 1件 学術コンサル 1件	病態解析学分野 准教授 田村 彰吾	受託研究 2件
創成看護学分野 助教 コリー 紀代	共同研究 1件	病態解析学分野 講師 大久保 寅彦	受託研究 1件
医用生体理工学分野 教授 神島 保	受託研究 1件	リハビリテーション科学分野 教授 遠山 晴一	共同研究 1件
医用生体理工学分野 教授 石川 正純	受託研究 1件	リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子	共同研究 3件 受託研究 2件
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典	受託研究 1件	リハビリテーション科学分野 教授 澤村 大輔	共同研究 2件
医用生体理工学分野 講師 松谷 悠佑	受託研究 1件	リハビリテーション科学分野 教授 寒川 美奈	受託研究 1件 学術コンサル 1件
病態解析学分野 教授 石津 明洋	共同研究 2件 受託研究 1件 学術コンサル 1件	リハビリテーション科学分野 准教授 長谷川 直哉	共同研究 1件
病態解析学分野 教授 恵 淑萍	共同研究 4件 受託研究 1件	リハビリテーション科学分野 講師 高島 理沙	受託研究 1件
病態解析学分野 教授 山口 博之	共同研究 1件	健康科学分野 教授 山内 太郎	受託研究 2件
病態解析学分野 准教授 櫻井 俊宏	学術コンサル 1件	健康科学分野 教授 小笠原 克彦	共同研究 1件 受託研究 1件

受賞状況（令和7年3月～令和7年10月（一部令和7年2月を含む））

所属・職名・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文／演題名・研究題目・受賞理由等
市立札幌病院放射線部 (R5年度放射線技術科学専攻卒業) 今谷 綾奈 2025.2.15	第24回日本医療情報学会 北海道支部学術大会 若手研究奨励賞	演題名：札幌市を対象とした地震による道路閉塞時の 救急搬送時間の可視化
病態解析学分野 講師 西端 友香 2025.3.3	第43回北海道医学会研究奨励賞	対象論文：Cathepsin C inhibition reduces neutrophil serine protease activity and improves activated neutrophil-mediated disorders. Nature Communications, 2024, 15(1), 6519.
医学院修士課程1年 (R6年度放射線技術科学専攻卒業) 南 和孝 2025.4.13	第81回日本放射線技術学会総会学術 大会学生賞	演題名：Evaluation of 18F-FDG PET/CT Report generation system using prompting methods
医理工学院修士課程1年 (R6年度放射線技術科学専攻卒業) 温品 あい莉 2025.4.13	第81回日本放射線技術学会総会学術 大会学生賞	演題名：Evaluating the effects of internal organ motion on Expiratory Phase CBCT images for Pancreas SBRT
リハビリテーション科学分野 教授 澤村 大輔 2025.4.17	Journal of Rehabilitation Medicine 誌 Editors' choice	対象論文：Short-term effect of prism adaptation treatment on severity of unilateral spatial neglect following right hemispheric stroke: a systematic review and meta-analysis. Journal of Rehabilitation Medicine. 2025. 24:57:jrm42542.
病態解析学分野 助教 村山 迪史 2025.4.19	令和7年度日本心エコー図学会 海外学会発表優秀論文賞	対象論文：Optimal Cut Plane for Tricuspid Annular Plane Systolic Excursion Measurement. Journal of the American Society of Echocardiography. 2025. 38(6):516-519.

所属・職名・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文/演題名・研究題目・受賞理由等
創成看護学分野 助教 日野 真莉絵 2025.4.21	日本看護研究学会北海道地方会 2024 年度研究奨励賞	タイトル：妊婦看護職における自己管理認識尺度の開発と信頼性・妥当性の検証. 日本看護研究学会雑誌 46 巻 3 号 P145.
令和 6 年度研究生 R5 年度放射線技術科学専攻卒業 阿部 紀宜 2025.5.23	第 29 回 RADIOISOTOPES 誌 論文奨励賞	対象論文：チューブリン重合反応に対する X 線影響の検討—インビトロ再構成実験系を用いたアプローチ. RADIOISOTOPES, 2025. 74(1):103-108.
リハビリテーション科学分野 助教 越野 裕太 2025.5.25	第 98 回日本整形外科学会学術総会 優秀ポスター賞	演題名：片脚ジャンプ着地動作時のアキレス腱負荷に関係する下肢関節および足部キネマティクスの検討
修士課程 1 年 保健科学コース・生体情報科学 辰宮 大翼 2025.5.30	第98 回日本細菌学会総会 優秀発表賞	演題名：Chlamydia trachomatis (L2/434/Bu) の酸素分圧依存的な感染細胞適応機構においてミトコンドリアが果たす役割
修士課程 2 年 保健科学コース・生体量子科学 小川 直輝 2025.6.20	第40 回日本生体磁気学会大会 U35 奨励賞	演題名：ADHD 傾向による表情識別中の脳活動特性の検討
修士課程 2 年 保健科学コース・生体量子科学 小川 直輝 2025.7.22	International Society for the Advancement of Clinical Magnetoencephalography 2025 Meeting Top Abstract Award	演題名：Implicit Neural Sensitivity to Negative Facial Expressions in Individuals with ADHD Tendency
修士課程 2 年 保健科学コース・生体量子科学 小川 直輝 2025.7.28	日本生体磁気学会 若手研究者奨励賞	演題名：Implicit Neural Sensitivity to Negative Facial Expressions in Individuals with ADHD Tendency
健康科学分野 講師 吉村 高明 2025.7.31	第 7 回日本メディカル AI 学会学術 集会 優秀一般演題賞	演題名：尿道線量低減陽子線治療計画用 MR 画像に対する三次元超解像深層学習モデルの構築
修士課程 2 年 保健科学コース・生体量子科学 山本 吏理亜 2025.7.31	第 7 回日本メディカル AI 学会学術 集会 優秀ポスター演題賞	演題名：深層学習を用いた CT 画像における骨盤骨折自動検出の基礎的検討
修士課程 2 年 保健科学コース・リハビリテーション科学 葛石 大入 保健学科 4 年 作業療法学専攻 松本 陽太 2025.8.1	第 46 回日本炎症・再生医学会 優秀演題賞	演題名：関節リウマチにおける老化細胞の同定と老化細胞除去による滑膜炎の抑制
特別研究学生 安田 彩夏 2025.8.20	International Society of Exposure Science – International Society for Environmental Epidemiology 2025 Students and New Researchers Network Poster Award	演題名：Exposure to Phthalates and their Associations with Short-Chain Fatty Acids in Plasma among School Children: The Hokkaido Study
修士課程 2 年 保健科学コース・健康科学 出口 大揮 2025.8.30	第89 回日本細菌学会北海道支部学術 総会 優秀賞	演題名：Chlamydia trachomatis (L2/434/Bu) の封入体膜に集積する pAkt(Ser473) の局在について：pAkt は封入体膜の microdomain に集積する
創成看護学分野 助教 田中 裕子 2025.9.7	日本地域看護学会第 28 回学術集会 優秀演題賞	演題名：地域包括支援センター保健師の地域づくりに関する専門能力評価尺度の信頼性の検討
修士課程 2 年 保健科学コース・生体情報科学 柳本 幸太 2025.9.13	日本超音波医学会第55 回北海道地方 会学術集会 優秀演題賞	演題名：心臓リハビリテーションが早期の左室駆出率が保たれた心不全の左房機能に与える影響と運動耐容能との関連
学術研究員 渡辺 隼人 2025.9.13	生体医工学シンポジウム2025 ベストリサーチアワード	演題名：Alpha Rhythm Modulation Associated with Reaction Times during Simulated Autonomous Driving

所属・職名・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文/演題名・研究題目・受賞理由等
創成看護学分野 講師 岩田 由香 2025.9.26	日本看護研究学会第 51 回学術集会 最優秀演題賞	演題名:多重介護者におけるセルフケア尺度 (Self-Care Scale for Compound Caregivers : SCSCC) の開発
修士課程 2 年 保健科学コース・生体情報科学 金 洛伶 2025.9.27	第35 回日本臨床化学会北海道支部例 会 若手優秀演題賞	演題名: LDL の酸化修飾が培養肝細胞におけるコレステロール排出・貯蔵経路に及ぼす影響
修士課程 2 年 保健科学コース・生体情報科学 佐久間 姫乃 2025.9.27	第59 回日本臨床検査医学会北海道支 部総会 優秀演題賞	演題名: DHMBA のコレステロール合成阻害作用
博士後期課程 1 年 保健科学コース・先進医療科学 村上 奈々緒 2025.9.27	第59 回日本臨床検査医学会北海道支 部総会 優秀演題賞	演題名: LDL 誘導泡沫化細胞から apoA1 が引き抜く脂質種の解明
健康科学分野 講師 吉村 高明 2025.10.2	第 11 回北海道大学部局横断シンポジ ウム研究助成採択銀賞	テーマ: 超低磁場 MRI による MR 画像誘導即時適応陽子線治療システムの開発
病態解析学分野 准教授 田村 彰吾 2025.10.2	第 11 回北海道大学部局横断シンポジ ウム研究助成採択銅賞	テーマ: マルチオミクス解析とエピゲノム操作で刷新する巨核球分化系譜
健康科学分野 准教授 Bomme Gowda SIDDABASAVE GOWDA 2025.10.2	第 11 回北海道大学部局横断シンポジ ウム研究助成採択銅賞	テーマ: Integrated omics network for early bio-marker discovery in human breast cancer
健康科学分野 助教 Divyavani GOWDA 2025.10.2	第 11 回北海道大学部局横断シンポジ ウム研究助成採択奨励賞	テーマ: Do infant formulas mimic similar cholesterol ester levels to Human milk?
病態解析学分野 助教 陳 一凡 2025.10.2	第 11 回北海道大学部局横断シンポジ ウム研究助成採択奨励賞	テーマ: Association rules and frequent items study on the plasmalogen species in human breast milk
リハビリテーション科学分野 講師 高島 理沙 2025.10.2	第 11 回北海道大学部局横断シンポ ジウム研究助成採択ベストプレゼン ター賞	テーマ: Creating New Spaces for Retired People to Prevent Social Isolation: The Potential of Community Sheds (Men's Sheds)
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典 2025.10.9	National Council on Radiation Protection and Measurements 2026 John D. Boice Jr. Young Investigator Award	

■ 人事異動（令和7年4月～令和7年10月）

● 令和7年4月1日

（採用）	我妻 慧	医用生体理工学分野 准教授
	日野 真莉絵	創成看護学分野 助教
	堀 生実	態解析学分野 特任助教
	趙 捷宇	健康科学分野 特任助教
	片岡 義明	地域共生モデル創発分野 特任助教

● 令和7年5月1日

（採用）	志沢 陽子	健康イノベーションセンター 特任助教
------	-------	--------------------

● 令和7年5月31日

（退職）	秦 葳	研究院長付（健康科学分野）助教
------	-----	-----------------

● 令和7年7月31日

（退職）	Perumalsamy PARASURAMAN	研究院長付（健康科学分野）助教
------	----------------------------	-----------------

platys

広報誌の名称
「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな2本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys（プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す）に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

プラテュス第35号 2025年12月

〈発行〉

北海道大学 大学院保健科学研究院 広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目

〈連絡先〉

医学系事務部 保健科学研究院事務課 庶務担当
電話 011-706-3315 E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
ウェブサイト <https://www.hs.hokudai.ac.jp/>

